鳥取市文化財報告書12

帆城遺跡・天神山遺跡調査報告

1982

鳥取市教育委員会

鳥取市文化財報告書12　帆城遺跡・天神山遺跡調査報告　一九八二　鳥取市教育委員会

帆城遺跡・天神山遺跡調査報告正誤表

ページ	誤	正
図目次	第9図石列遺構	第9図石組遺構
表目次	表9出土遺物観察表	(石器) を加える。
5ページ24行	頭初	当初
9ページ	第5図 SI・1―・2	SI・1
10ページ32行	溝付辺	溝付近
11ページ第8図右下	SK・2石列状	SK・2土坑状
26ページ表1	出土遺物観察表	(　) を付したものは現存値を加える。
29ページ46,2行	くし抽き	くし描き
30ページ表5	(　) を付したものは現存値	削除
31ページ表7，第26図1	手づくね整形	手づくね成形
図版3 中右	B地区5グリッド石列検出状況	B地区5グリッド石組検出状況
図版3中左	A地区溝状遺構・石列掘方検出状況	A地区溝状遺構・土坑掘方検出状況

序

豊かな水と緑に恵まれた郷土鳥取市は、また有形無形の文化遺産を多く今日につたえ、市民の誇りとなっております。郷土の文化遺産としての埋蔵文化財は、情緒豊かな市民社会の育成にとって大きな役割を果すものであります。先人の生活と心に学び、文化を継承発展させてゆくことは、現代に生きる我々の義務でもありましょう。

鳥取市教育委員会といたしましても、文化財の重要性を十分に認識し、その保護、保存に鋭意努力しているところであります。

今回の発掘調査は、県道飛行場布勢線工事中に発見された帆城・天神山遺跡の保護を目的として実施したものであります。調査の内容は本文で述べるとおりですが、鳥取市の埋もれていた古代が掘りおこされ、多大の成果を得ることができました。

この調査記録が、多くの市民各位に活用され、埋蔵文化財への理解を深め、認識を新らたにする上で役立つとともに、わずかでも学問の進展に貢献できればと願うものであります。

調査事業に際しましては、関係各方面各位の温かいご援助、ご協力を賜わりました。厚くお礼申し上げるものであります。

鳥取市教育委員会
教育長　田村一三

例　　言

1．本書は、昭和56年度に発掘調査を実施した帆城（ハンジョウ）遺跡、布勢天神山遺跡の調査報告書である。発掘調査は、鳥取県の委託を受け鳥取市教育委員会が実施した。調査期間は、昭和56年7月1日から昭和57年3月25日までである。

2．調査地は、鳥取市桂見字先帆城843、鳥取市湖山町字下帆城607－3ほかに所在する。

3．本書に掲載した実測図、図版写真は、調査に参加した全員の協力によって作製した。

4．本書に用いた方位は第1図、第2図を除いて磁北を示し、レベルは、海抜標高である。

5．本書の編集執筆は、調査参加者はじめ多方面の方々の指導、援助を得て中野知照、前田均、杉谷美恵子、平川誠が行なった。

6．発掘調査によって作製された図面及び出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。

本　文　目　次

序

第１章　遺跡の立地と歴史的環境……　1

第２章　調査の経過……　4

第３章　発掘調査の概要……　5

第１節　帆城遺跡……　5

第１項　Ａ地区の調査……　5

第２項　Ｂ地区の調査……　12

第３項　検出された遺物……　13

第２節　天神山遺跡……　23

第１項　検出された遺物……　24

第４章　ま　と　め……　33

挿　図　目　次

第１図　鳥取市西北部遺跡分布図……　3
第２図　帆城・天神山遺跡周辺地図……　5
第３図　帆城遺跡調査地点配置図……　6
第４図　帆城遺跡（Ａ地区）遺構配置図……　7
第５図　ＳＩ・１平面断面実測図……　9
第６図　ＳＩ・１ピット内完形甕出土状態実測図……　9
第７図　ＳＩ・１内出土遺物実測図……　10
第８図　溝状遺構平面断面実測図……　11
第９図　石列遺構平面断面実測図……　12
第10図　銅製品実測図……　13
第11図　土錘実測図……　13
第12図　出土遺物実測図（弥生式土器・１）　14
第13図　出土遺物実測図（弥生式土器・２）　15
第14図　出土遺物実測図（弥生式土器・３）…　16
第15図　出土遺物実測図（石製品・１）……　17
第16図　出土遺物実測図（石製品・２）……　18
第17図　出土遺物実測図（石製品・３）……　19
第18図　出土遺物実測図（石製品・４）……　20
第19図　出土遺物実測図（石製品・５）……　21
第20図　出土遺物拓影図（古銭）……　21
第21図　出土遺物実測図（中世陶磁器類）……　22
第22図　天神山遺跡調査地点配置図……　23
第23図　天神山遺跡グリッド断面図……　23
第24図　出土遺物実測図（弥生式土器）……　24
第25図　出土遺物実測図（銅鏃）……　24
第26図　出土遺物実測図（土錘）……　24
第27図　出土遺物実測図（中世陶磁器）……　25

表　目　次

表　1　出土遺物観察表……　26
表　2　出土遺物観察表……　27
表　3　出土遺物観察表……　28
表　4　出土遺物観察表……　29
表　5　出土遺物観察表……　30
表　6　出土遺物観察表……　31
表　7　出土遺物観察表（土錘）……　31
表　8　県内銅鏃出土地一覧表……　31
表　9　出土遺物観察表……　32

図　版　目　次

図版１　帆城遺跡遠景、他
図版２　Ａ地区住居跡（ＳＩ・１）、他
図版３　Ａ地区溝状遺構（ＳＤ・１）、他
図版４　天神山遺跡遠景、他
図版５　帆城遺跡出土遺物（弥生式土器）
図版６　帆城遺跡出土遺物（弥生式土器）
図版７　帆城、天神山遺跡出土遺物
図版８　帆城遺跡出土石製品
図版９　帆城遺跡出土石製品
図版10　帆城遺跡出土中世関係遺物
図版11　天神山遺跡出土中世関係遺物

第１章　遺跡の立地と歴史的環境

帆城遺跡は、鳥取市布勢・桂見両地内にあり、国鉄鳥取駅より西方へ約５km程の所で、「長者伝説」で知られる湖山池の南東岸に位置する。湖山池は、中国山地に源を発する千代川によって膨大な量の土砂が日本海に運ばれ、鳥取平野の海岸部に古砂丘が形成されてできた潟湖である。古砂丘は、中期洪積世にはその原形が出現し、その後気候変化と海水面変動によって陸化する。沖積世に入って温暖な気候を迎え海面が高くなり（縄文海進）鳥取湾が形成されその最盛期は縄文時代前期といわれる。この海進による堆積作用で現在の平野部が完成し、海岸部では、古砂丘に次いで新砂丘が覆いかぶさり鳥取湾の外壁となった。その内側はかつて入海であったが、布勢天神山周辺の砂州が障害となって、土砂の流入を防ぎ、縄文時代中期になって海水面が後退し取り残された部分が湖山池ラグーンとなった。

湖山池周辺の縄文時代の遺跡は、後期に入ってから出現してくる。この時期では青島・桂見・布勢・大桝遺跡などの低湿地遺跡がそれである。これらは、いずれも湖山池の南東岸の後背湿地に立地し、冬期における北西風を防ぐため低丘陵や低丘陵端の東裾に立地するのが特徴である。桂見遺跡は、前期最終末の土器を出土しているが、主体となるのは後期前半で中期～後期まで断続的であれ継続している。布勢・青島遺跡が後期中葉に比定され、布勢遺跡では少数ではあるが中期・晩期の土器も出土している。このうち、桂見・布勢遺跡では大量の木製品・種子類を出土したことで知られる。特に布勢遺跡では当時の生活・漁労・交易などを想起させる品や木製鉢・漆塗木製品などを出土している。また、性格は判然としないが杭と矢板状のものが組まれた遺構も確認されている。

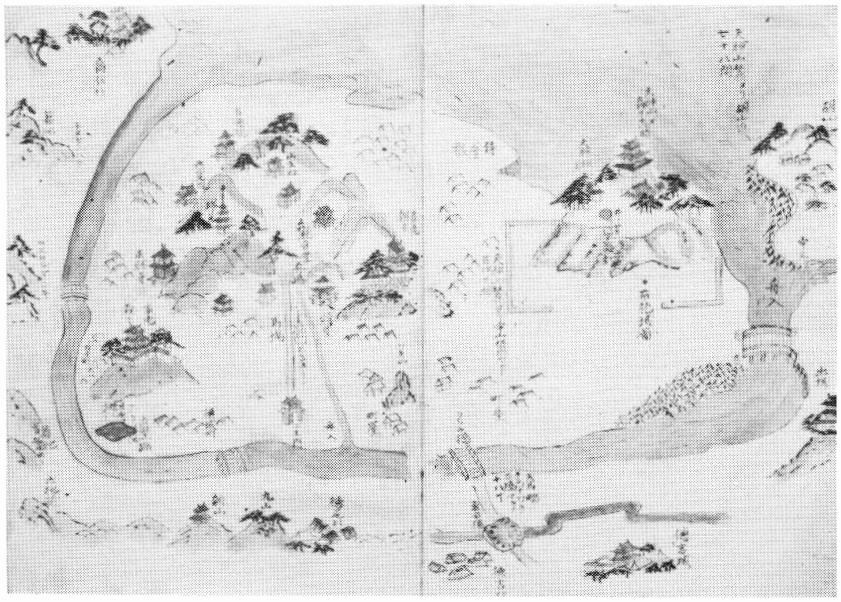
弥生時代になると、鳥取平野の段丘や自然提防・微高地上に多くの生活空間が営まれてくる。千代川左岸での分布状況は、前・中期を主体とする岩吉遺跡をはじめ、主体となる時期が中期以降の青島・湖山第２・松原・布勢・帆城・大桝遺跡がみられる。また流水文銅鐸を出土した高住遺跡もある。後期後半から古墳時代にかけての特異な祭祀的要素をもった秋里・塞ノ谷遺跡がみられ、終末期には、湖山池を見下す丘陵上に一辺64m の西桂見四隅突出型方形墓が造られている。

古墳時代に入ると、肥沃な鳥取平野の農業生産力を背景とした勢力分布が認められる。特に、湖山池周辺には因幡地方の大型古墳が集中する。湖山池南東約１kmに全長92m の桝間１号墳があり、古墳群で最古で最大である。次いで湖山池東・北岸の布勢古墳（59m）、大熊段１号墳（47m）、三浦１号墳（36m）等の前方後円墳がみられる。これらに対し、平野部を持たない湖山池南岸の丘陵でも20～50m 級の前方後円墳７基の存在が確認されており、農業生産力のみではなく、湖山池の水上交通を支配下に入れた中小豪族層が被葬者であろう。また、湖山池南東約２kmの野坂川右岸の丘陵上には約60m の前方後方墳がみられる。古墳以外では、多量の木製品を出土した塞ノ谷遺跡、集落跡が確認された松原・布勢・大桝・秋里遺跡等の他、青島・岩吉遺跡がみられる。

大化改新（645年）以降、律令体制の整備が行われる中で土地区画制度の条里制がある。千代川左岸でも条里制が施行され、天平勝宝７年（755年）、「東大寺領因幡国高草郡高庭庄坪付注進状案」（『東大寺東南院文書』）によって南北10条にわたり、条・里・郷・坪名が記載されている。湖山池東岸の布勢郷を中心とする条里制地域内の東大寺領高庭庄の開発にあたっては、国司・郡司および当該地域の地方豪族の積極的な協力があったはずで、その中に国造勝磐の名もみられる。『東大寺東南院文書』では８世紀半ばから11世紀初頭までの高庭庄の様子を知ることができる。このうち、承和９年（842年）の高庭庄券第三によると湖山池東岸・南東岸の田名として、舶負田・倉見田・葦原田・草尾田等の名がみられ、夫々現在の布勢・桂見・里仁地域に比定される。この時期での遺跡は確認されていないが、『延喜式』神名帳には湖山池東岸地域に伊和神社・大野見宿禰命神社が記載されており、地方豪族集団の占有地が想起できる。

その後、東大寺の政治的地位の低下に伴い高庭庄の経営も悪化していくことにより、高草郡の豪族も衰退していったと思われる。

湖山池周辺が、歴史上に再びクローズアップされることになったのは、室町時代に入って因幡守護・山名氏が天神山を居城（天神山城）としてからである。天神山城に関する古記録は比較的よく残存しており、小泉友賢によって著された『因幡民談記』や安部恭庵が著した『因幡志』などの他に、多数の古絵図がある。これらによると、山頂の天守や堀割・寺社・町屋等の様子が描かれている。天神山城は、天正元年（1573年）鳥取城にその本拠を移したことによって、因幡の守護所としての機能を失い、実質上歴史の舞台から姿を消してゆくことになった。しかし、その当時の堀割・赤社・町屋の跡は、絵図面や土地に地形・字名として後世に伝えられている。



「因幡軍談記」所収絵図

1　西桂見遺跡
2　桂見遺跡（縄文～古墳）
3　布勢第１、第２遺跡（縄文～中世）
4　天神山遺跡（縄文～中世）
5　湖山（三浦団地）遺跡（弥生～中世）
6　岩吉遺跡（縄文～中世）
7　大桷遺跡（弥生～中世）
8　青島遺跡（縄文～古墳）
9　塞ノ谷遺跡（弥生～古墳）
10　松原遺跡（弥生～平安）
11　帆城遺跡（縄文～中世）
12　大熊段１号墳
13　桷間１号墳
14　布勢古墳
15　古海36号墳
16　高住銅鐸出土地

凡　例

古墳密集地

集落遺跡、他

主要古墳

城跡

第１図　鳥取市西北部遺跡分布図

第2章　調査の経過

鳥取市の西部に静かな湖面のたたずまいをみせる湖山池は、長者伝説と冬の石がま漁で知られ、鳥取市民のオアシスとなっている。この環境を後世に伝えるべく1979年（昭和54）には歴史的風土保存と自然環境保全を目的として「風土と一体化した歴史的環境の広域保存地域計画」の湖山池地区として歴史的環境広域保存調査委員会によって調査が行なわれている。

また一方で湖山池周辺は、躍進する鳥取市の象徴として1985年(昭和60)鳥取国体の主会場となる布勢総合運動公園を中核に、鳥取空港拡張事業、各道路網の整備と建設、教育施設の移転と整備、住宅用地の開発と大きく変貌をとげている。

県道布勢飛行場線は、鳥取空港と布勢総合運動公園を結び、交通の円滑化と土地の有効的利用をはかるため、都市計画事業として建設が進められていた。1979年(昭和54)この桂見地内の工事現場で弥生式土器を採取したとの通報を受けた鳥取市教育委員会は、現地に担当者を派遣し、遺物の出土を確認した。遺物は、歩道の盛土に多く見受けられたが、この盛土は、車道の路床入替、あるいは側溝部分の掘削土と考えられた。さっそく事業者である鳥取県と遺跡の取り扱いについて協議するとともに、未着工となっている道路予定地全線についての分布踏査を実施した。この結果、県道飛行場布勢線計画路線上に3ヶ所（桂見字先帆城、湖山町字下帆城、湖山町南4丁目）の遺物散布地が存在することが判明した。

協議によって、遺跡の発見地である桂見所在の散布地については工事がすでに着工しており、路線変更が不可能であると判断され、事前に発掘調査が必要となった。また他の2ヶ所の散布地の取り扱いについて、布勢天神山城の西側にあたる湖山町字下帆城（布勢天神山遺跡）は、試掘調査を実施したのち再協議、湖山町南4丁目の遺物散布地については、協議を継続していくことになった。

その後、発掘調査の実施時期、体制、方法について協議を重ねたが、鳥取市教育委員会では、同時に県道停車場布勢線に伴う発掘調査（古海所在遺跡、里仁所在古墳）を依頼されており、鳥取市教育委員会の調査体制では同時並行で調査を進めることは困難であった。結局、県道停車場布勢線に伴う発掘調査終了後に調査を実施することとなった。

調査地の帆城、天神山遺跡の調査はまとめに記したように中世山名氏の守護所布勢天神山城の城下と考えられ、後世の絵図等でそのにぎわいを知ることができる。しかし、現在鳥取農業高校を中心として宅地化が進み、それを実証してゆく機会が失なわれつつあるなかで行なわれたものである。

発掘調査は、鳥取県の委託を受けた鳥取市教育委員会が1981年(昭和56)7月から1982年(昭和57)3月の期間をもって実施した。調査の実施にあたっては、多くの人々のご指導とご支援をいただいた。記して感謝いたします。

第３章　発掘調査の概要

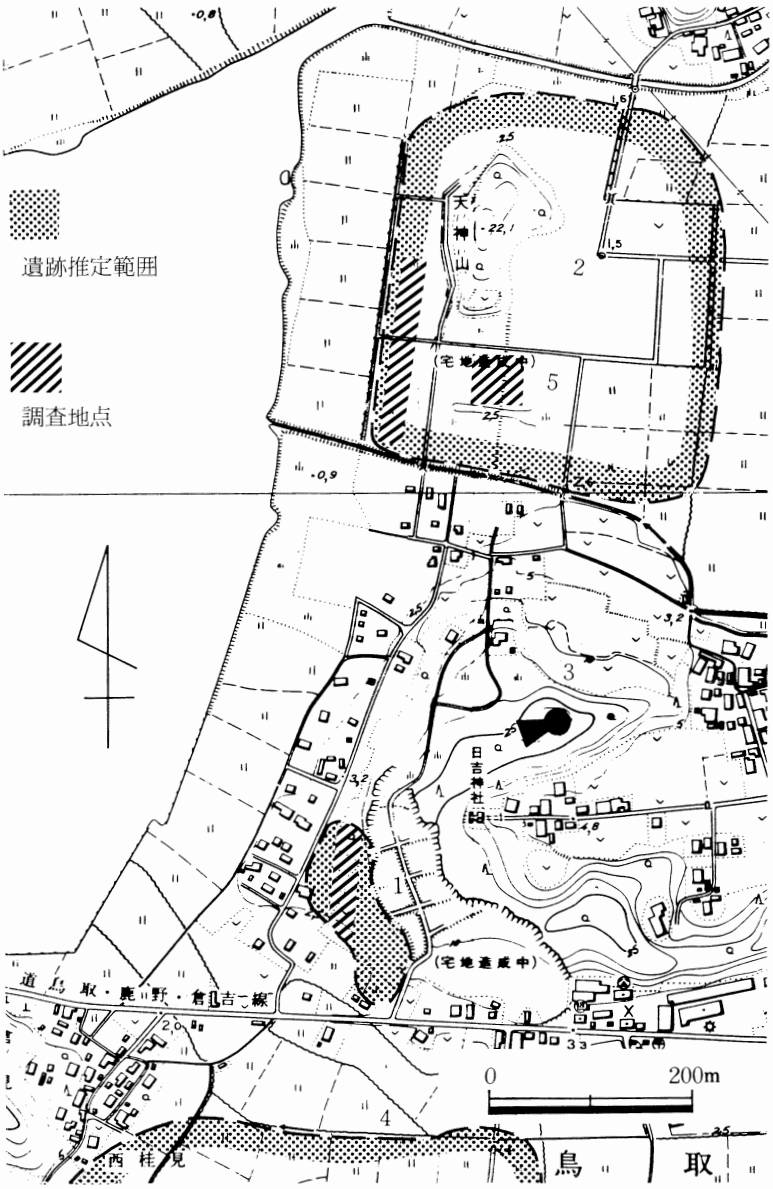
今回の調査は、県道飛行場布勢線計画路線内で確認された桂見字先帆城、湖山町字下帆城地区の遺物散布地をそれぞれ帆城遺跡、天神山遺跡と呼称した。帆城遺跡では、湖山池に向けて突出した高台を境いにして南側をＡ地区、高台を含めて北側をＢ地区として調査を行った。天神山遺跡では、計５箇所にグリッドを設けて試掘を行った。

第１節　帆城遺跡

帆城遺跡は、布勢山王日吉神社背後にある丘陵（宇山）の西麓に所在する。調査地区のほぼ中央部に西方に伸びる高台があり、この高台の北側（Ｂ地区）と南側（Ａ地区）では遺跡の性格が異っている。即ち、Ｂ地区では明確ではないが中世あるいはそれ以降の遺構を伴う遺跡。Ａ地区では、高台寄りに中世関係遺構、その南側には弥生時代遺構を伴う複合遺跡であることが確認できた。

第１項　Ａ地区の調査

Ａ地区の調査は、頭初４箇所のグリッドを設定し、遺構を確認した上で順次調査区を拡張してゆき、可能な限り全面調査に近い調査を行った。Ａ地区は、以前バラスを敷設して仮道路とし多数の工事車輌が通過しているため、非常に固く締



1　帆城遺跡　　2　天神山遺跡　　3　布勢１号墳

4　桂見遺跡　　5　天神山遺跡（昭和48年度県教委調査地点）

第２図　帆城・天神山遺跡周辺地図

っていた。これに加えて、調査開始が盛夏であったため盛土等の除去に大変な苦労が強いられた。

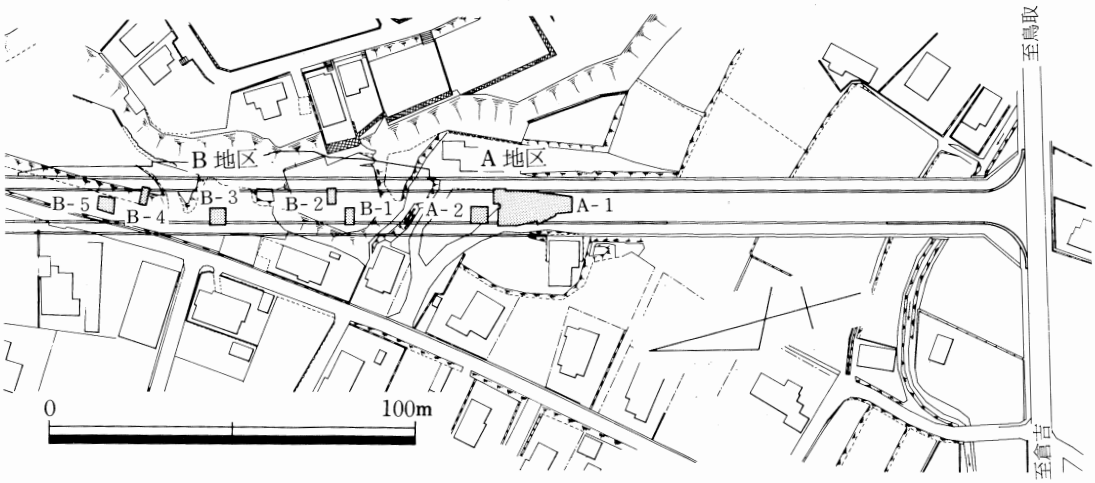
A地区の土層は、細かな堆積を繰返しているが、弥生時代遺構面までを大別するとほぼ3層に別けられる。①盛土（暗茶褐色粘質土層），②中・近世包合層（暗褐色粘質土層），③弥生時代包含層（暗灰褐色粘質土層）であり、③層の上面で中世と思われる井戸跡を検出している。中世関係の遺構は井戸の他、調査区の北側でローム層を掘込んだ溝（堀？）状遺構を検出している。③層の下面及び溝状遺構の南側のローム層には、弥生時代後期に属する住居跡、土坑等の遺構を検出した。調査区東北部の弥生遺構の上に、中世の溝を堀削した土を盛り上げていたことを確認している。

住居跡（SI・1）　挿図4～7，図版2

調査区のほぼ中央部で正南北方位をとる。住居跡のほぼ中央で北側はローム、南側は暗茶褐色粘質土（強い粘性）に分かれる。住居跡の北側には2条の側溝がローム層に掘込まれている。壁高は側溝の残る北側で35cmを測り、他の壁は確認できない。側溝は幅20cm前後、深さ10cm前後の溝が隅丸方形にめぐる。柱穴は4穴ありP 1より順に(30×45－64)，(48×42×－64)，(52×45×－73)，(37×37－60)cmの大きさである。柱穴間隔はP 1より3.20,3.35,3.65,3.27mを測る。床面中央には焼土を持った土坑（SK・3）66×60－32cmがあり炉跡と思われる。

遺物は、住居跡床面より弥生式土器片及び石製品が多数出土している。特に検出状況の明らかなものとして，P9より高杯，P10より完形甕、SK・3より壺が検出された。これらの出土品から本住居跡は、弥生時代後期の中頃の隅丸方形の竪穴住居跡と考えられる。

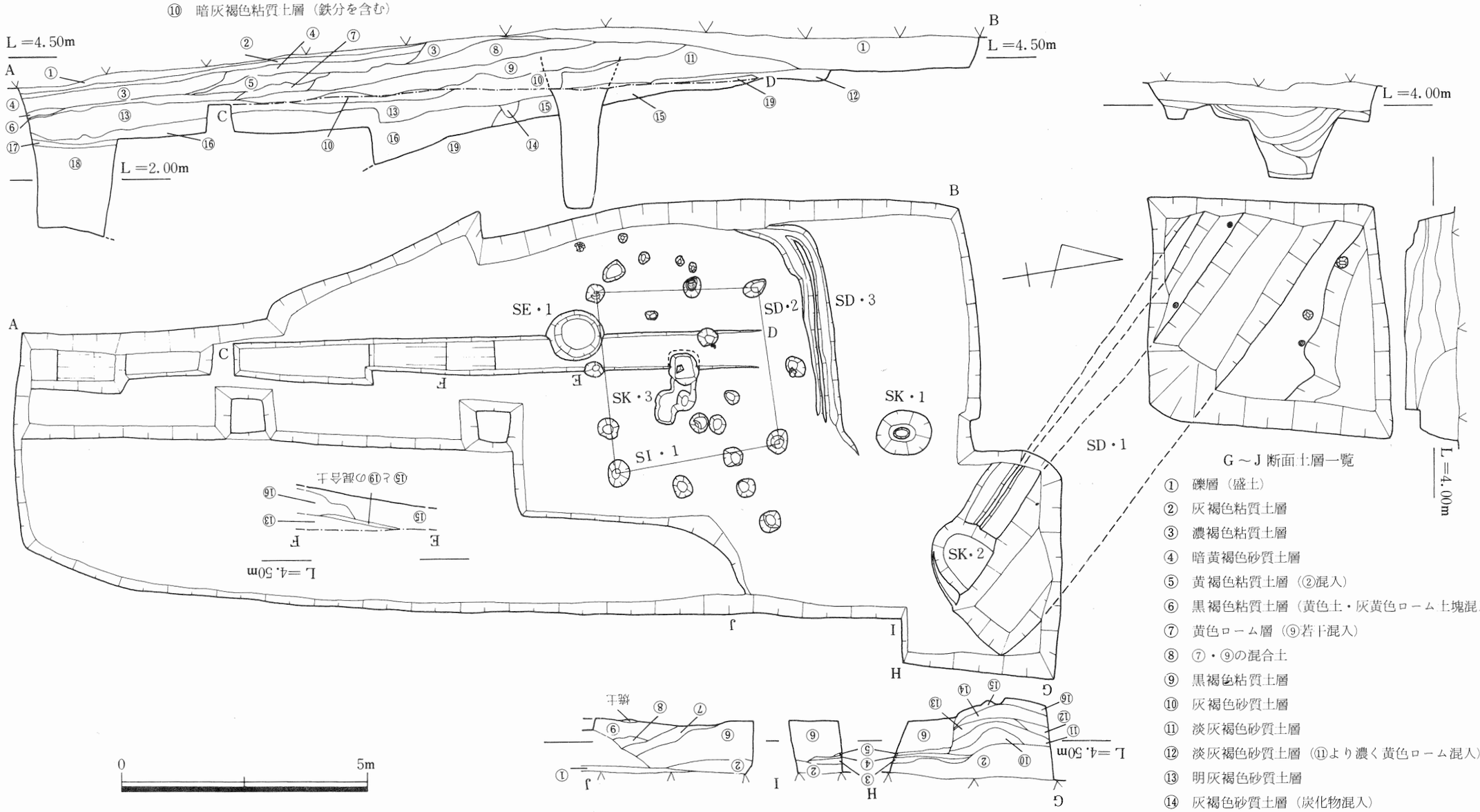
また、遺構面の多数のピット、2条の側溝及びSK・3の東南部の焼土をもつ土坑の存在等により、少くとも2回以上の建替えがあったと考えられる。しかし、現状や図上で復元しえたのは1棟のみであることを考えると、建替え以前の住居の柱穴をそのまま再利用したと思われ、側溝も同方向に掘られていることにより相互の時期差は余りなかったといえよう。側溝の時間差は、SD・2が先行するがSI・1と同時期かどうかは確定できない。



第3図　帆城遺跡調査地点配置図

A～D
E～F 断面土層一覧

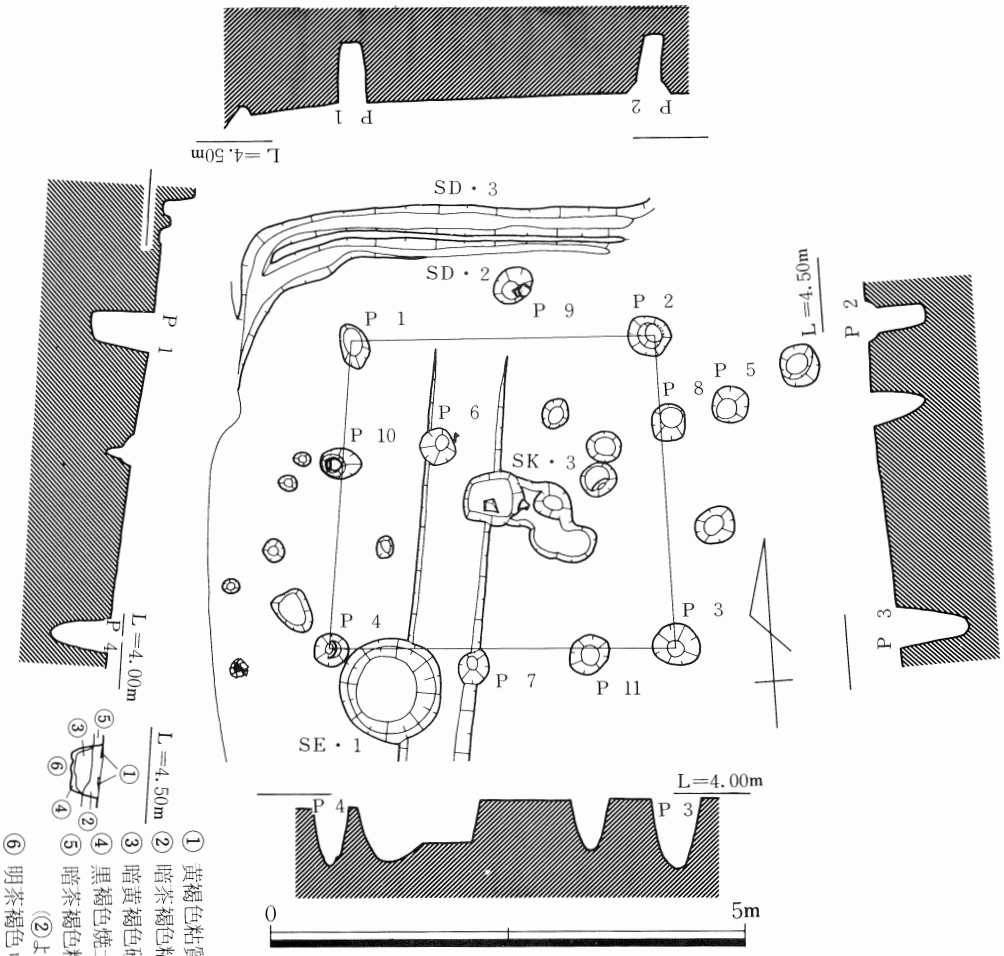
① 礫層（盛土）
② 暗茶褐色粘質土層
③ 暗褐色粘質土層（明黄褐色土塊混入）
④ 黄茶褐色砂質土層
⑤ 濃茶褐色シルト層（黄褐色粘質土塊混入）
⑥ 茶褐色粘質土層（鉄分を含む）
⑦ 暗灰褐色粘質土層（黄褐色粘質土塊混入）
⑧ 灰褐色粘質土層（黄褐色粘質土塊・鉄分混入）
⑨ 暗褐色シルト層（鉄分を均一に含む）
⑩ 暗灰褐色粘質土層（鉄分を含む）
⑪ 暗茶褐色粘質土層
⑫ 明褐色粘質土層（⑪を多く含む）
⑬ 暗灰褐色粘質土層（鉄分を含み土器片を多量に包含する）
⑭ ⑬と鉄分の混合土
⑮ 暗茶褐色粘質土層（⑪より粘質が強い）
⑯ 暗灰褐色粘質土層（⑫に比べ鉄分が少ない）
⑰ 灰褐色粘質土層
⑱ 黒褐色粘土層
⑲ 明黄褐色ローム層（地山）



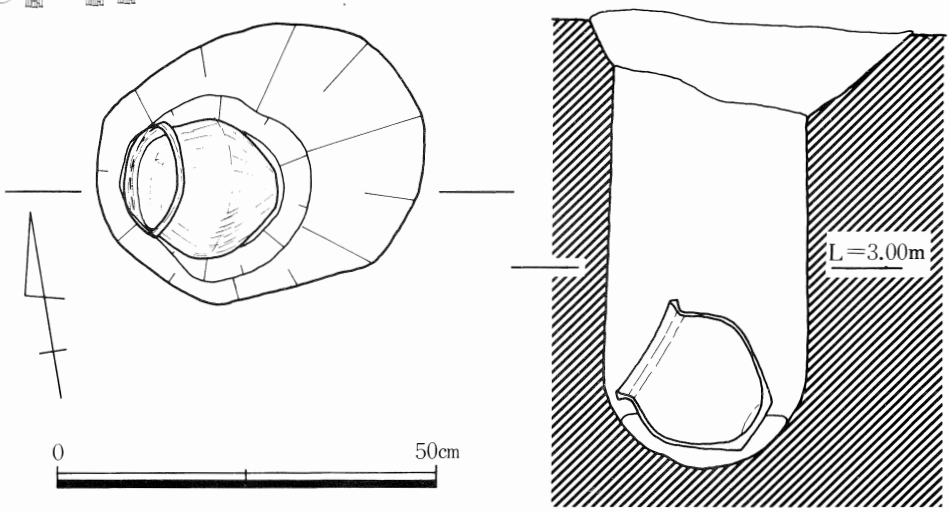
G～J 断面土層一覧

① 礫層（盛土）
② 灰褐色粘質土層
③ 濃褐色粘質土層
④ 暗黄褐色砂質土層
⑤ 黄褐色粘質土層（②混入）
⑥ 黒褐色粘質土層（黄色土・灰黄色ローム土塊混入）
⑦ 黄色ローム層（⑨若干混入）
⑧ ⑦・⑨の混合土
⑨ 黒褐色粘質土層
⑩ 灰褐色砂質土層
⑪ 淡灰褐色砂質土層
⑫ 淡灰褐色砂質土層（⑪より濃く黄色ローム混入）
⑬ 明灰褐色砂質土層
⑭ 灰褐色砂質土層（炭化物混入）
⑮ 黒褐色粘質土層（黄色ローム混入）
⑯ 暗灰褐色粘質土層

第４図　帆城遺跡（Ａ地区）遺構配置図



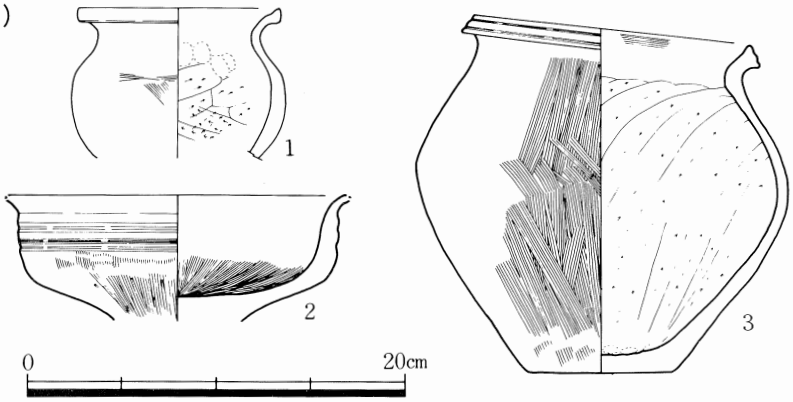
第5図　S I・1—・2平面・断面実測図



第6図　S I・1ピット内完形甕出土状態実測図

土坑状遺構（ＳＫ・２）

Ａ地区の北東隅にあり主軸は北に対し東へ45度傾いている。築造時期は不明であるが、溝状遺構（ＳＤ・１）が完全に埋没した後である。土坑は、幅1.35m前後、長さ3.30m以上、深さ約55cmを測る。土坑内には多数の角礫が充填されており、一部に意図的な配置を示すものも見受けられたが全体的には規則性は見出せない。この土坑の性格は明確ではないが、あるいは雨落溝の性格を持つものかもしれない。この場合の建物は、調査区外の東側に当るものと思われる。出土遺物は、土師質土器片のみで時期を決定する出土品はない。



第７図　ＳＩ・1内出土遺物実測図

土坑（ＳＫ・１）

Ａ地区Ａ－１北寄りＳＩ・１の北側で検出された。底部で２段に掘り込まれた土坑。ほぼ円形を呈し、直径1.3m，底径0.3m，深さ1,2mをはかる。遺物は検出されなかった。時期、性格とも不明であるが、ＳＩ・１の付属施設と考えることも可能である。

溝状遺構（ＳＤ・１）

Ａ－１の北東隅から主軸を北に対しほぼ西に45度傾いて掘削された溝である。北東隅では溝の端部が検出されており、溝の延長を確認するため調査区の北側にグリッド（Ａ－２）を設定して掘り下げた所、溝を検出したが、調査区外の西方へ伸びているようである。溝の断面は逆台形を呈しており、底部は平坦である。溝の幅1.60m前後、深さ1.60m前後を測る。溝の北側では、肩部より50～80cmの平坦面を取った後一段低くなって遺構面をとるようである。南側では、肩部より30cm前後の平坦面をとりその南側に幅40～60cm、高さ10～20cmの土壇を持つ。更にその南側に幅40cm前後、深さ（前記の土壇より）10～20cmの溝を持ち、南側は溝の掘削土を盛り上げて土塁状のものを築いているが詳細は不明である。

またＡ－２では、溝の南側の肩部で杭列状のピットを検出している。Ａ－１の北東隅の溝肩部では確認できなかったが、ほぼ等間隔で並んでいたとすればＳＫ・２の掘り方に切られていると思われる。

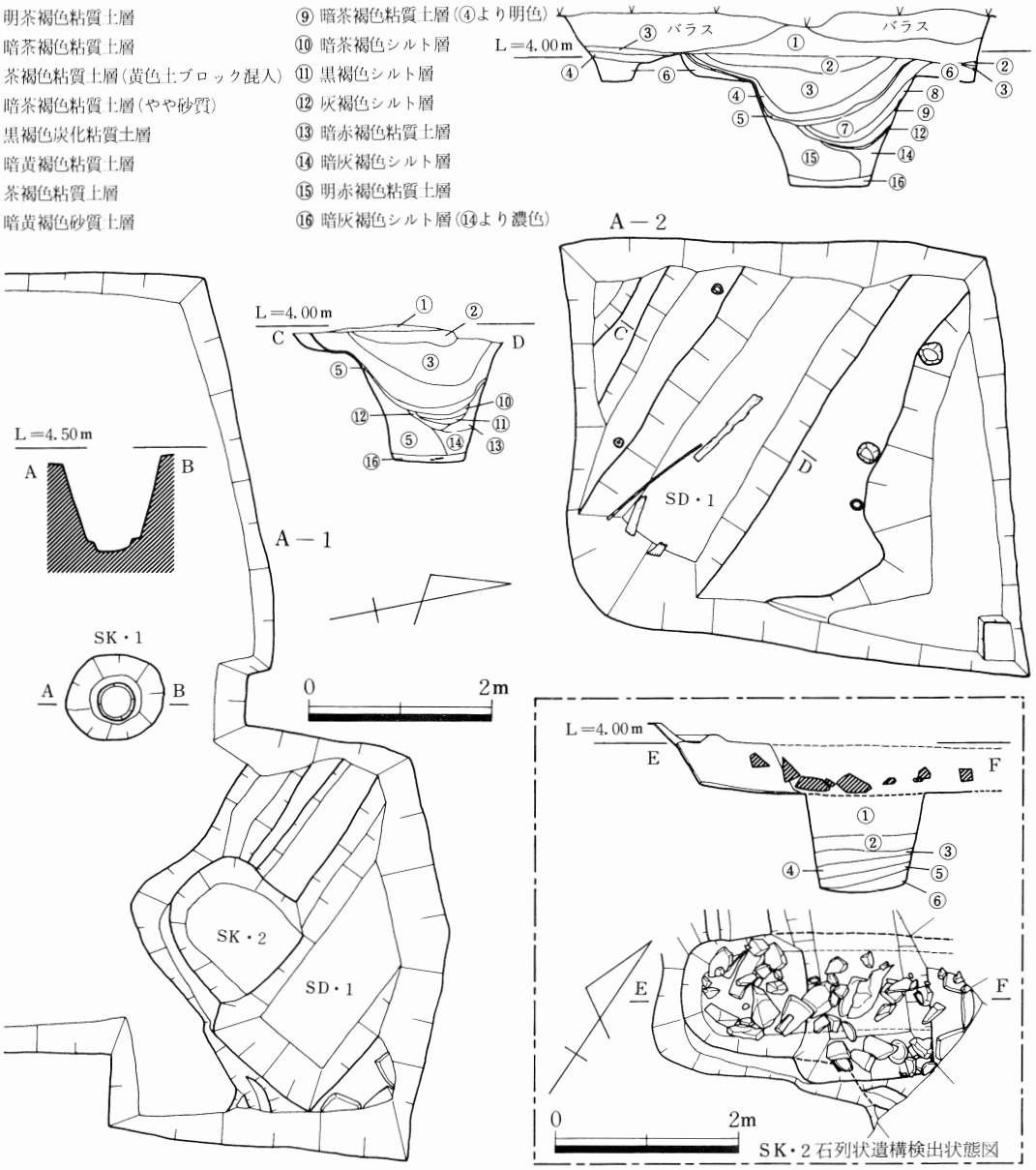
溝断面観察によれば、掘削後一度人為的に一部埋め戻し、その後３度にわたって溝としての機能を果しているようである。出土遺物は、⑯層の溝底では板状に加工した木片１点、第３次の溝底（⑫層）でも数点の加工木片を出土している。第４次の溝底（⑤層）では、完形の土師質皿１点と埋土中で数点の完形の土師質皿を検出している。また⑤層は、焼灰層を呈しており、この時期に溝付辺の建物が火災に遇っていたことが推察される。

溝の性格と時期は確定できないが、建築物に付属した堀の役割を果していたと思われる。もしそうだとした場合、A－1の北東隅の部分に門跡が設定できるのではなかろうか。時期・建物等については第4章で述べるが、室町以降の寺院跡ではないかと考えている。

井戸状遺構（SE・1）

A地区A－1中央西よりで検出。平面プランはほぼ円形を呈し、直径1.2m、底径0.5mをはかる。上部がやや開くものの筒形を呈し、深さは検出面より2.45mをはかる。上部には角礫を充填する。井筒などの内外部施設は検出されなかった。きぬた、はし状木製品が出土している。

① 明茶褐色粘質土層
② 暗茶褐色粘質土層
③ 茶褐色粘質土層（黄色土ブロック混入）
④ 暗茶褐色粘質土層（やや砂質）
⑤ 黒褐色炭化粘質土層
⑥ 暗黄褐色粘質土層
⑦ 茶褐色粘質土層
⑧ 暗黄褐色砂質土層
⑨ 暗茶褐色粘質土層（④より明色）
⑩ 暗茶褐色シルト層
⑪ 黒褐色シルト層
⑫ 灰褐色シルト層
⑬ 暗赤褐色粘質土層
⑭ 暗灰褐色シルト層
⑮ 明赤褐色粘質土層
⑯ 暗灰褐色シルト層（⑭より濃色）



第8図　溝状遺構平面・断面実測図

第２項　B地区の調査

A地区に北接する調査地をB地区として、南から１～５の番号を付した５ヶ所のグリッドを設定して調査を実施した。この地区は後世の削平、かく乱が多く、明確な遺構の検出がなかったが、北端の５Gにおいて石組遺構を検出している。

1G・2G　B地区南端の標高約10.5mの台地上に設定したグリッド。土師質土器の細片を数点出土しているが、後世に削平され、畑地として利用されていたため明確な遺構は検出されなかった。

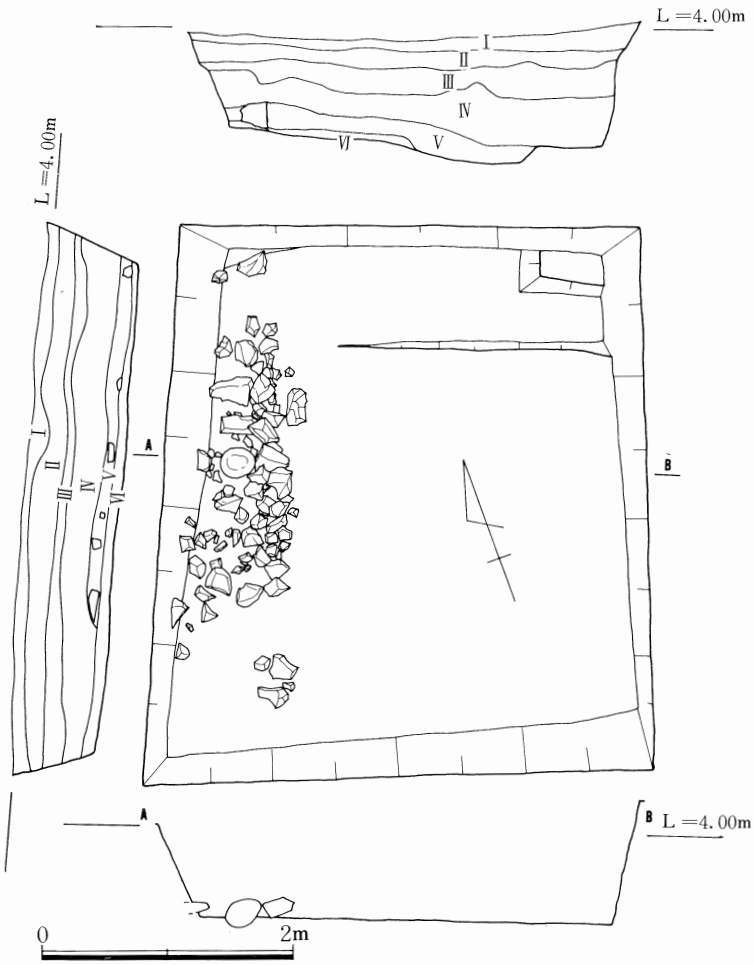
3G　遺物・遺構とも確認することが出来なかった。

4G　標高8.5mの台頂部から裾部にかけて斜面に設定したグリッド。土師質皿破片数点と永楽通宝１点が出土している。遺構の確認は出来なかった。

5G　B地区北端に設定した４m×４mのグリッドである。土層は上層からⅠ層表土、Ⅱ層褐色粘質土（黄褐色砂混入）、Ⅲ層灰色砂質土、Ⅳ層明褐色砂質土、Ⅴ層褐色砂質土（細砂を均一に混入）、Ⅵ層褐色土（やや砂質）、Ⅳ層内より土師質皿の細片が出土している。

他にこのグリッドからは、聖宋元宝１点、瓦質の火舎と思われる破片が出土している。

石組遺構　Ⅴ層においてほぼ南北に方位をとる石組遺構を検出した。こぶし大から人頭大の角礫で組まれているが、人頭大の円礫を１点含む。伴出遺物もなく性格は不明であるが、中世以降に構築されたものと思われる。



第９図　石組遺構、平面断面実測図

第３項　検出された遺物

帆城遺跡からは、縄文時代から近世までの各時代に属する各種の遺物が出土している。出土遺物について各時代ごとに概要を記す。

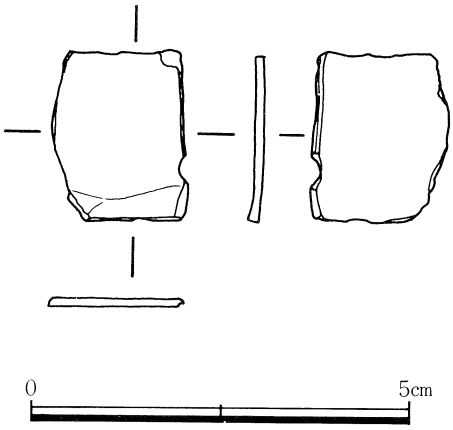
縄文時代　縄文時代の遺構は検出されておらず、遺物の出土状況も弥生時代包含層からであった。図示できなかったが、後期の所産と考えられる土器片数点が出土している。また第15～17図の石器のうち何点かは縄文時代の所産とも思われる。

弥生時代　弥生時代に属する遺物の多くは土器である。住居跡等遺構に伴うものもあるが、その多くは包含層からの出土である。編年的には後期中葉（青木遺跡編年Ⅲ期古）を中心としてその前後の時期におよぶ。器形は壺、甕、高坏、器台で構成される。石製品には、打製石斧、磨製石斧、偏平片刃石斧、石包丁、石鏃、磨石がある。注意したいのは、すり切り痕や研磨痕のある玉未製品が出土していることである

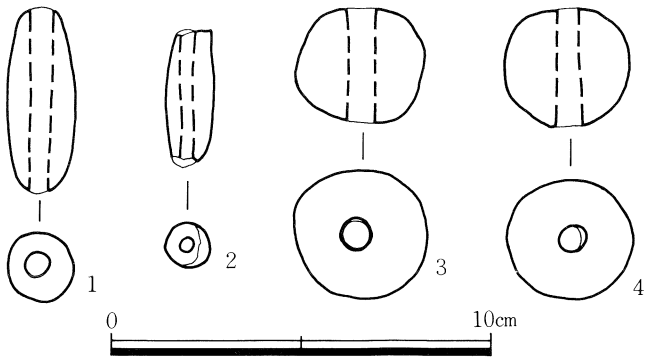
古墳後代　古墳時代に属すると考えられる遺物は出土していない。遺跡の消長を考えるうえで興味深い。

中世　中世関係の遺物として陶磁器類、土師質土器、銅銭などの金属製品、木製品がある。土師質土器を除いていづれも包含層からの出土である。陶磁器類には青磁、青白磁、白磁、染付などの輸入陶磁器の他備前焼、須恵器系陶器などの日本産陶磁器がある。土師質土器はすべてＳＤ･1からの出土である。銅銭には聖宋元宝（初鋳年北宗1101年）永楽通宝（初鋳年明1408年）がそれぞれ１点づつ出土している。木製品には、ＳＥ･1、ＳＤ･1から出土した板状木製品、はし、きぬたがあるが量的には少ない。

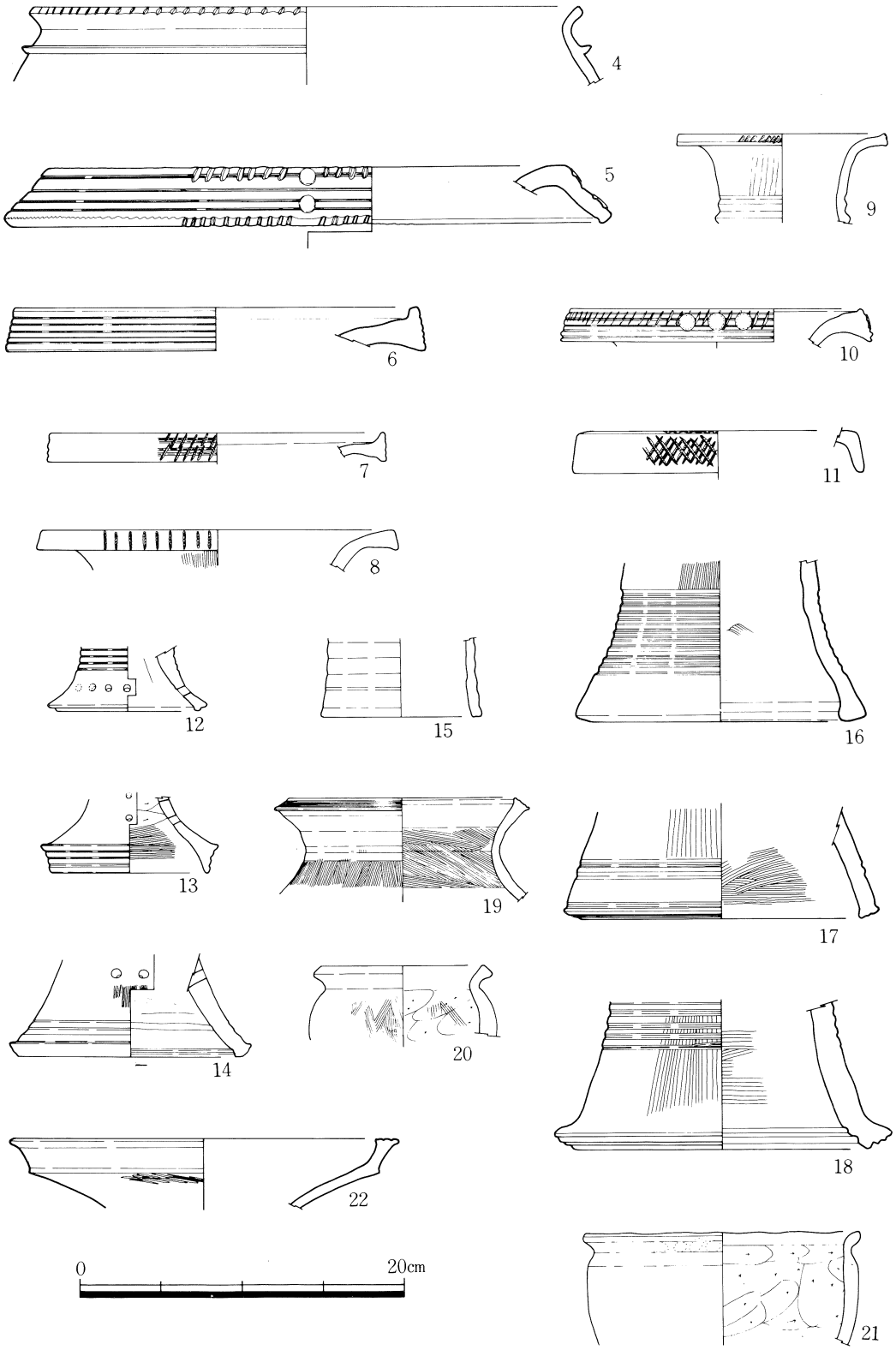
近世　寛永通宝１点及び産地不明の陶磁器片が出土しているが、陶磁器については、近代に下るとも考えられる。



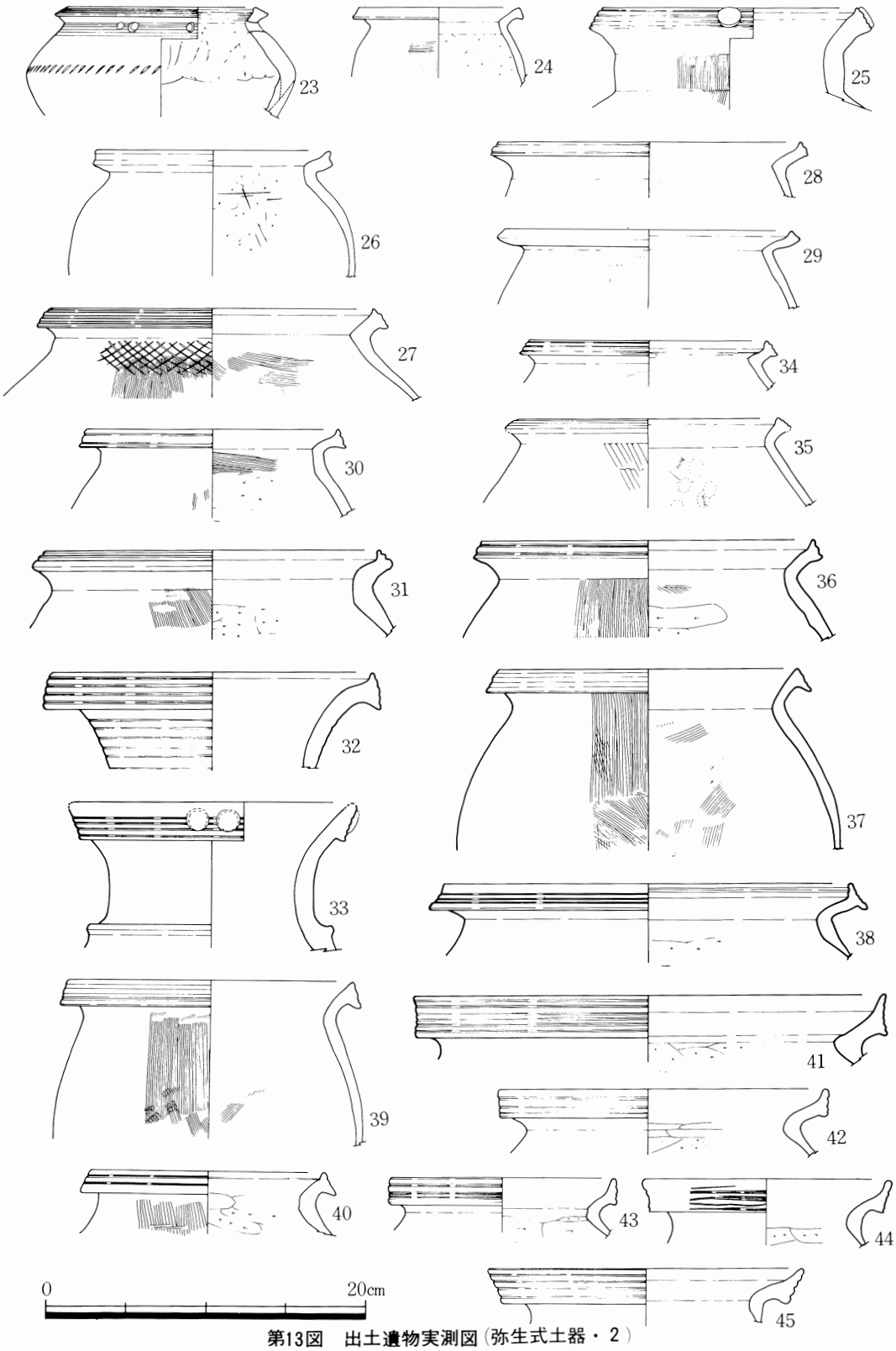
第10図　銅製品実測図



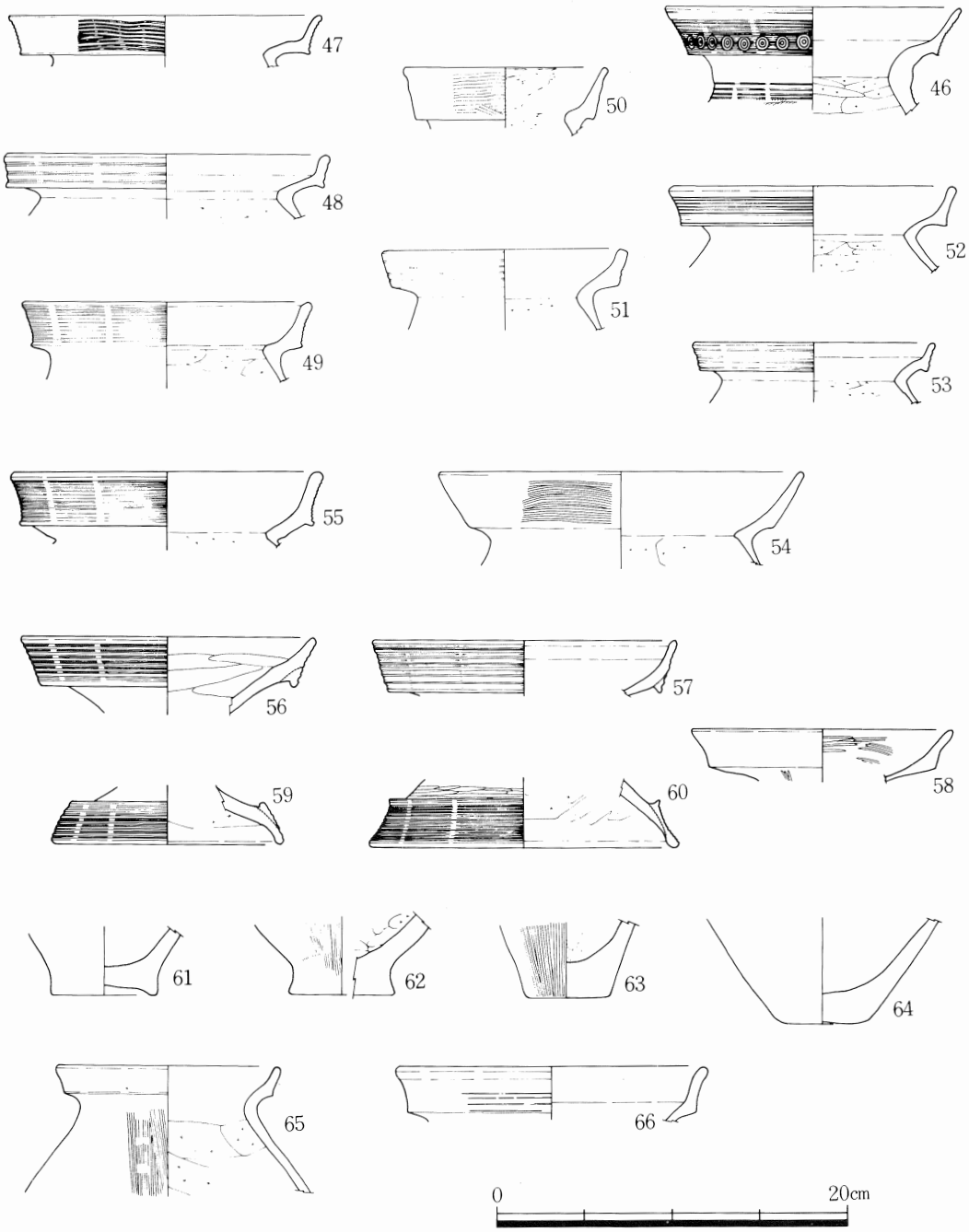
第11図　土錘実測図



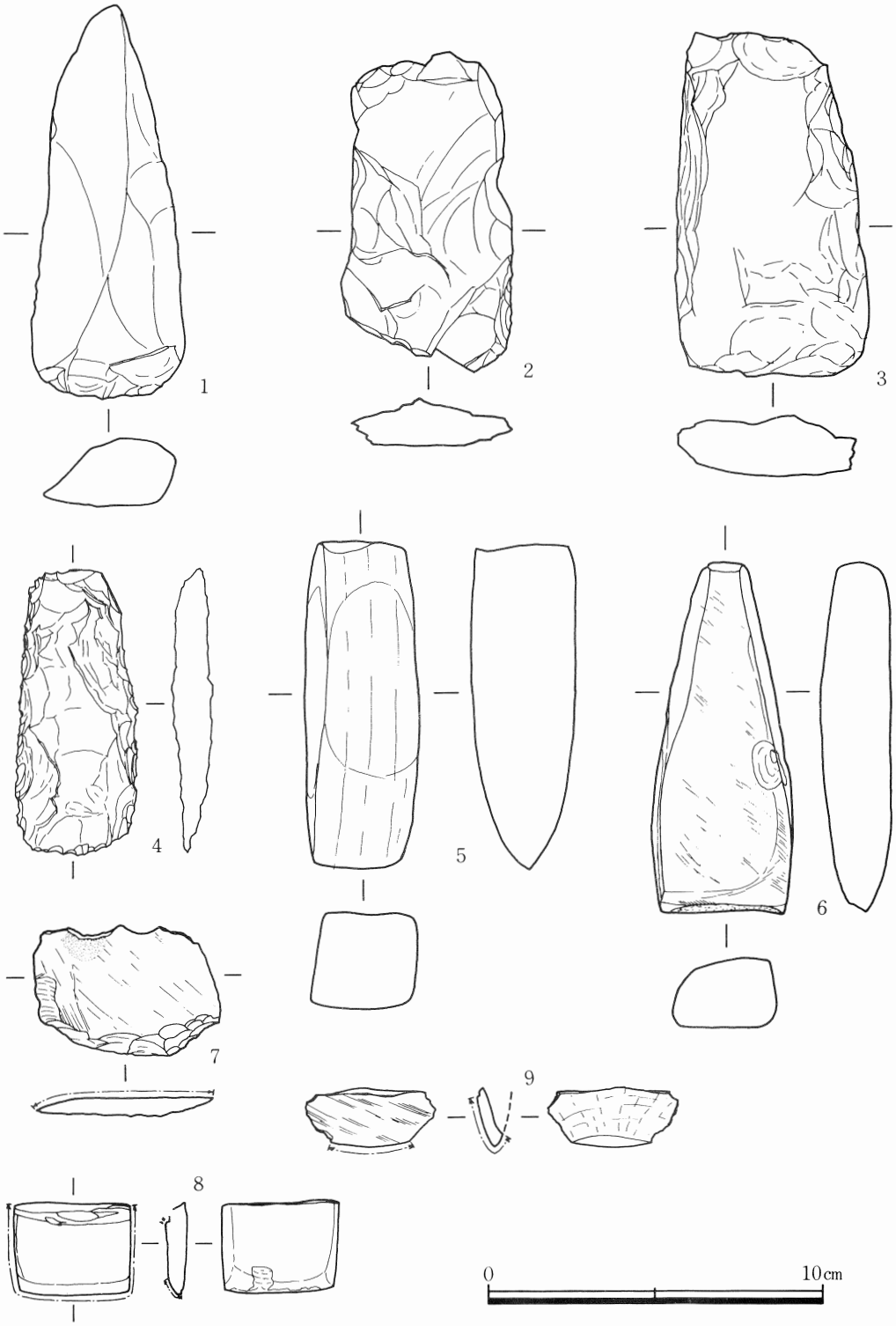
第12図　出土遺物実測図（弥生式土器・１）



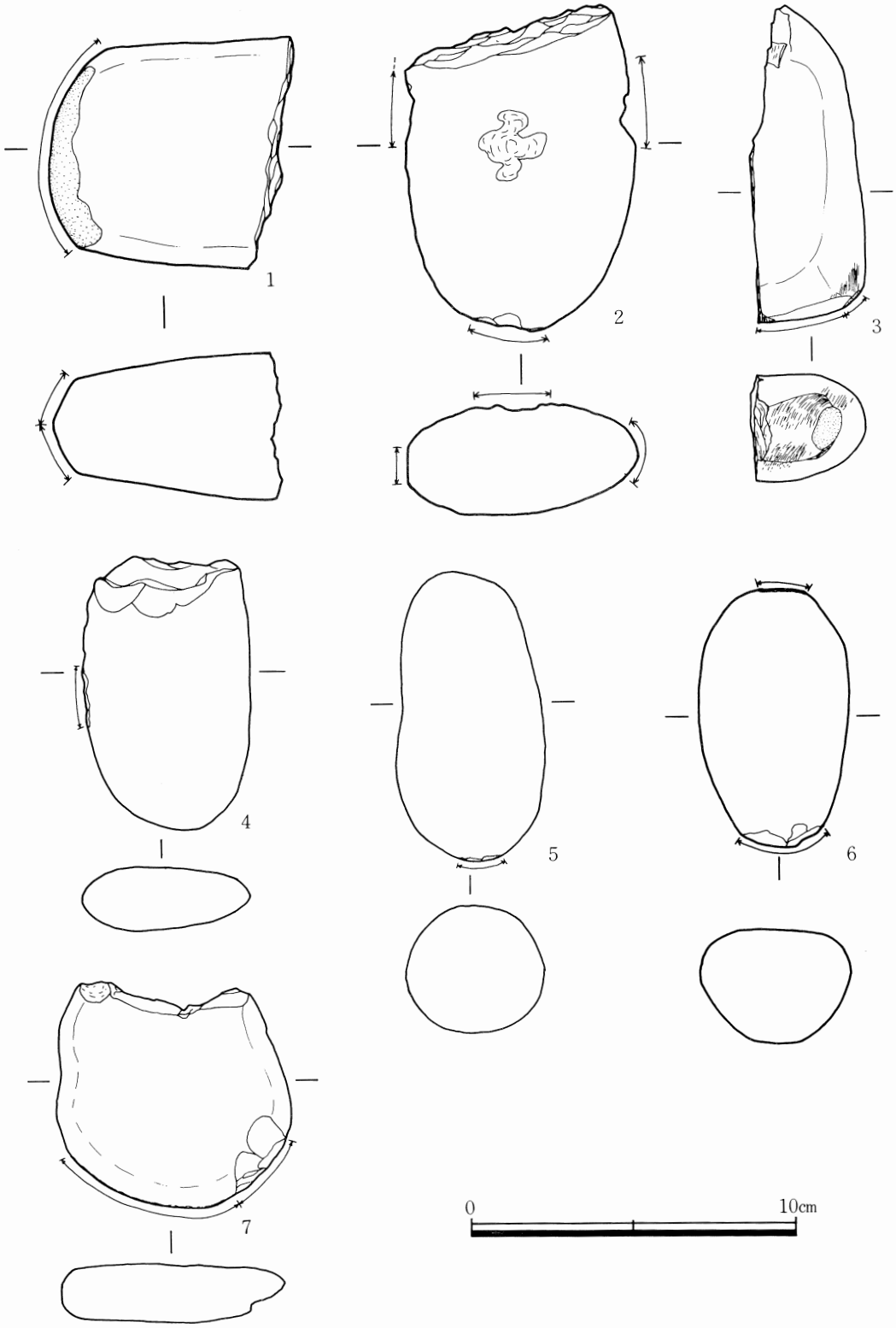
第13図　出土遺物実測図（弥生式土器・２）



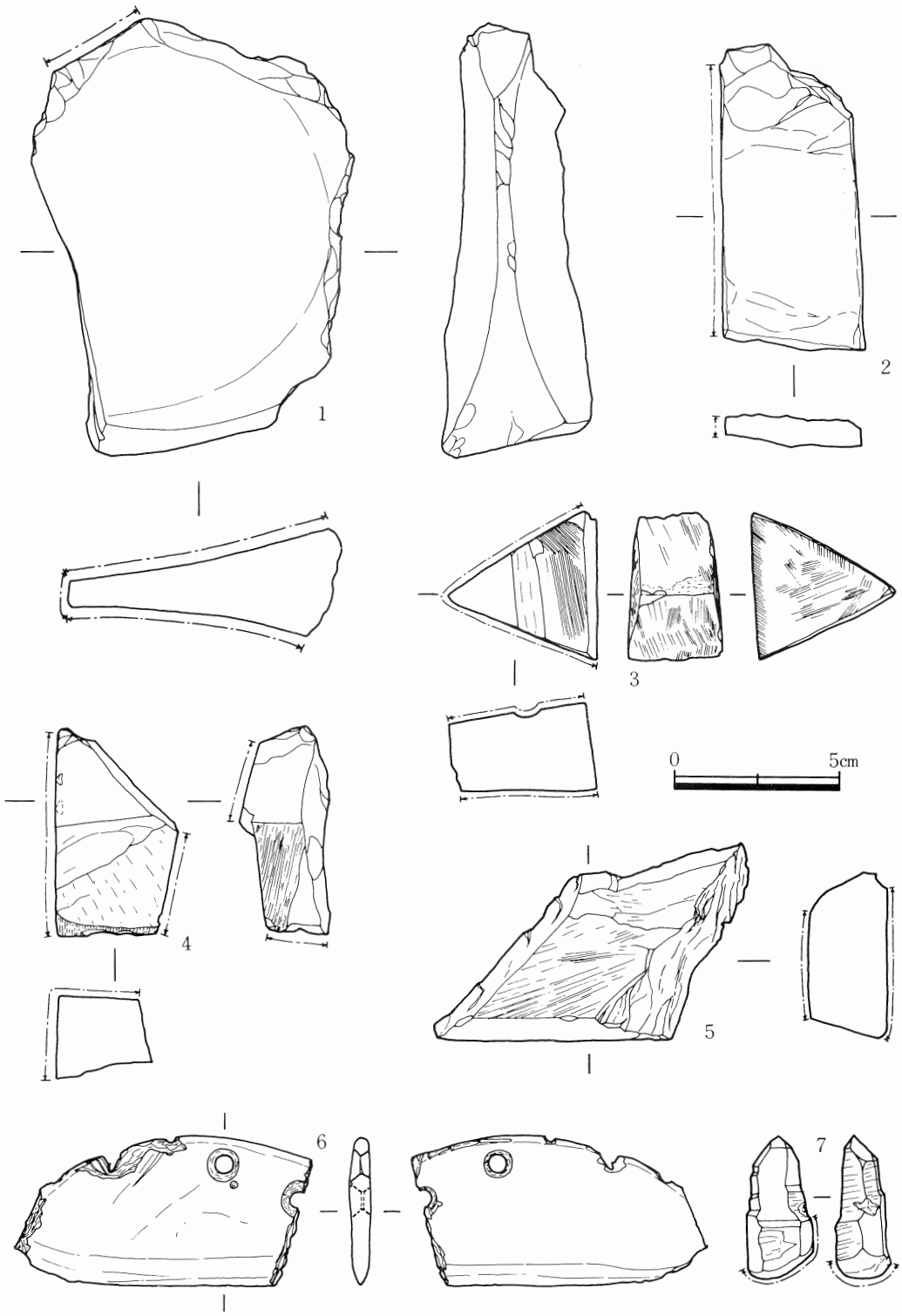
第14図　出土遺物実測図(弥生式土器・3)



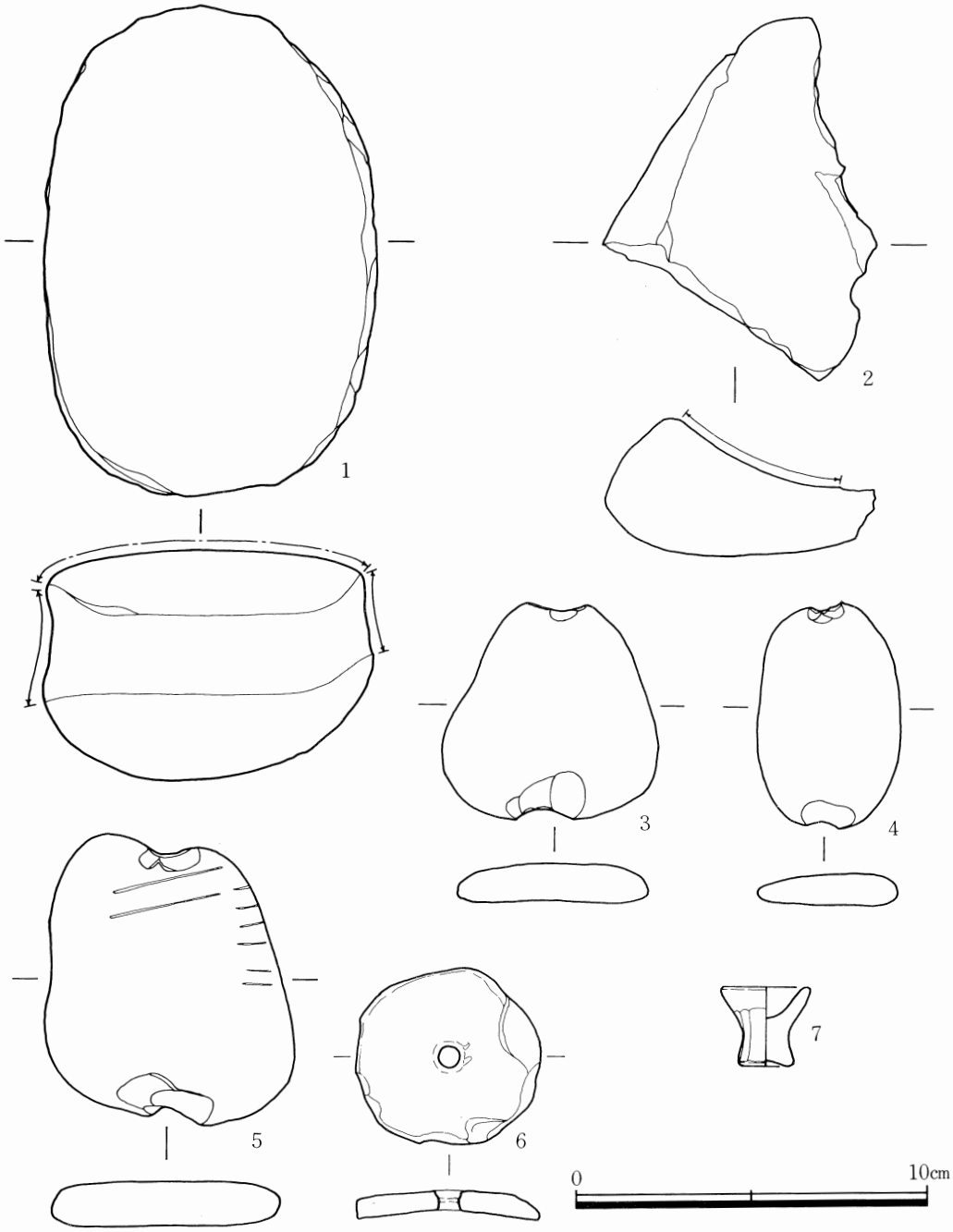
第15図　出土遺物実測図（石製品・１）



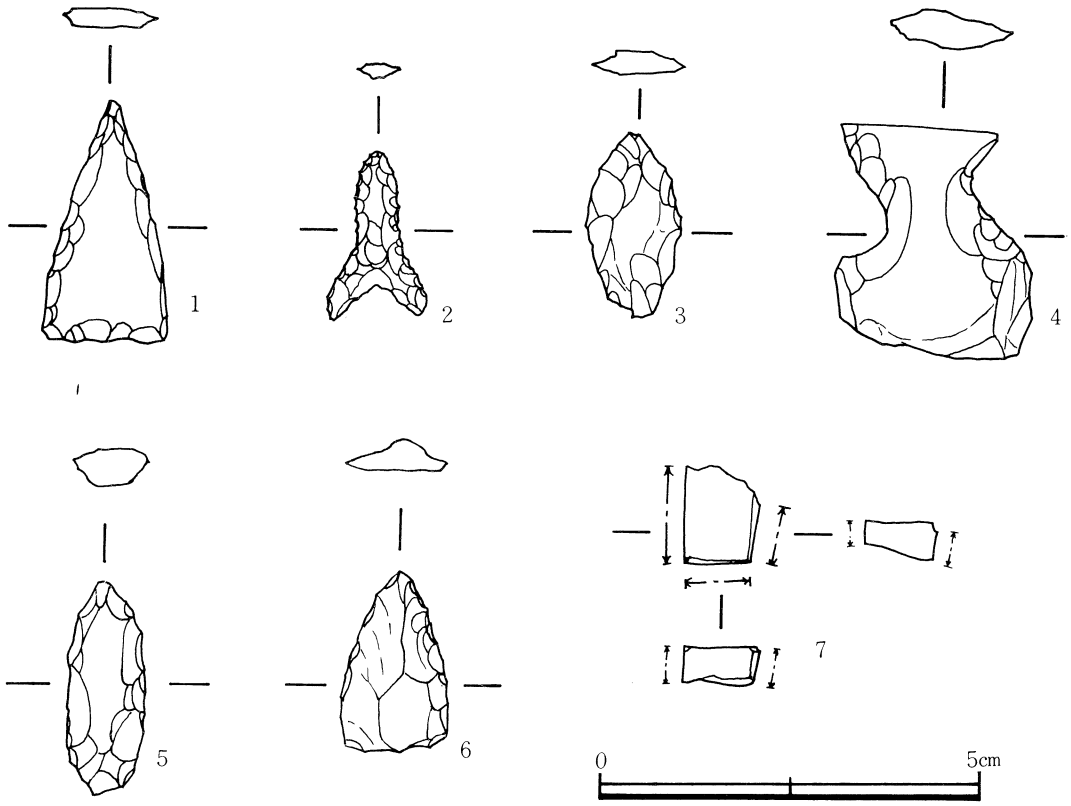
第16図　出土遺物実測図(石製品・2)



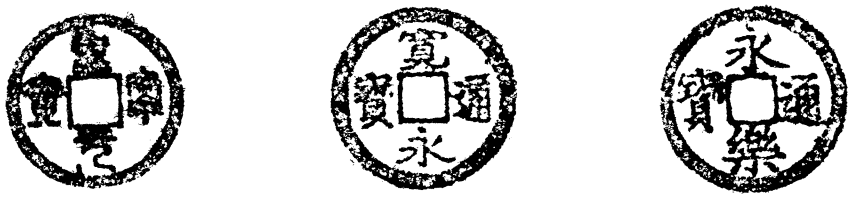
第17図　出土遺物実測図（石製品・3）



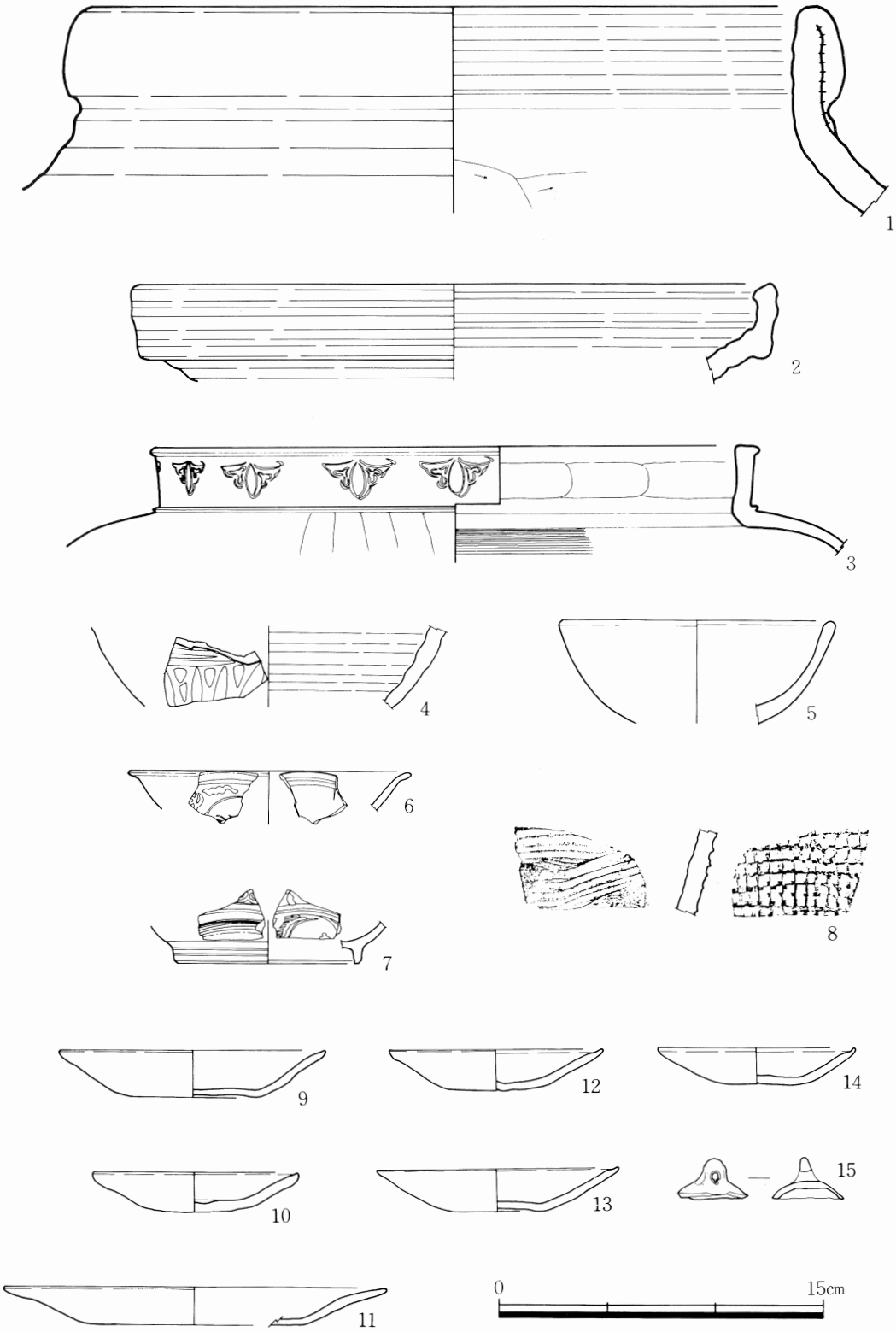
第18図　出土遺物実測図(石製品・4)　6・7は土製品



第19図　出土遺物実測図(石製品・5)



第20図　出土遺物拓影図(古銭)　(S＝1/1)

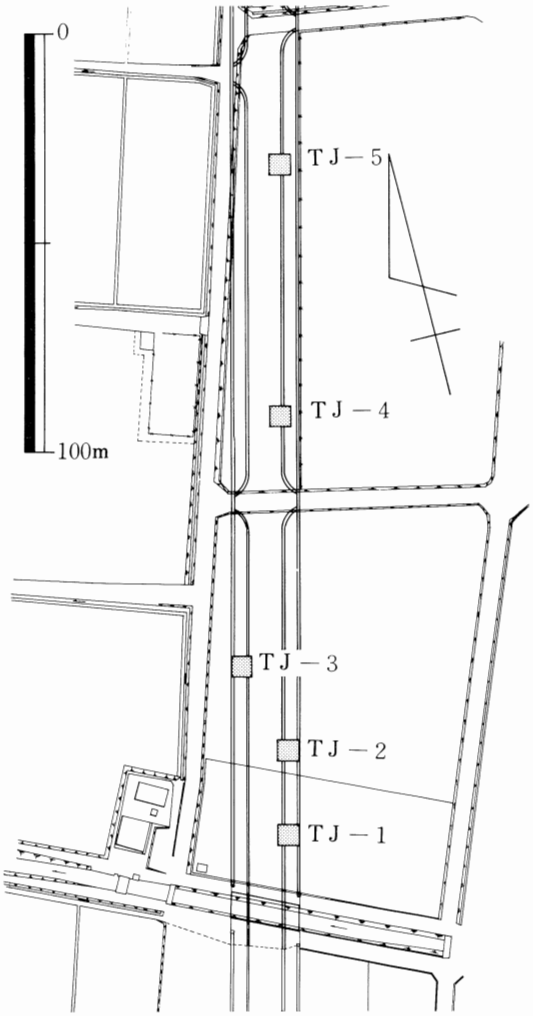


第21図　出土遺物実測図（中世陶磁器類）

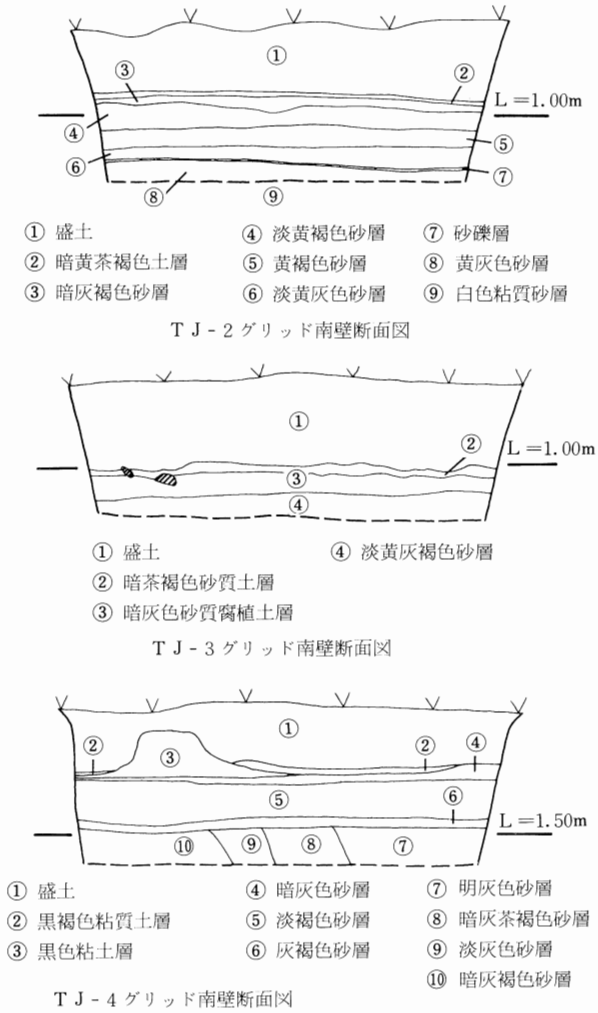
第２節　天神山遺跡

天神山遺跡は、室町時代に山名氏の居城として築かれた布勢天神山城及びその城下町跡を表わしている。遺跡の範囲は広義に解釈すると、北限は旧湖山川、南限は県道鳥取・鹿野・倉吉線、東限は布勢街道、西限は湖山池東岸と考えてよい。

今回の調査は、天神山の西側で鳥取県立鳥取農業高等学校農場の裏側に当る。散布が南北およそ300 m にわたって確認されていたため、道路側端部分について５ケ所のグリッドを設定して調査を行った。調査の結果、遺跡地の表土は、農校建設に際し掘削された天神山城堀内の埋土が、農場造成時に盛土されたものであった。盛土以前の堆積状況をみると、ＴＪ－４で耕作土がみられた以外全て砂層である。砂層は数層に分けられ、上層は１～1.6mの厚さで中世遺物包含層があり、その下に10～20cmの弥生・古墳時代遺物包含層がみられる。さらに砂層が続くが、無遺物層と思われる。ＴＪ－３は、昭和48年度・県教委調査で確認された外堀の西方延長上に位置しており、堆積の状況



第22図　天神山遺跡調査地点配置図



第23図　天神山遺跡グリッド断面図（S＝1/80）

も暗灰色砂質腐植土層を形成し加工された木片の出土もみるため、天神山城の堀跡と考えられる。中世遺物包含層では多量の土師質皿が出土しており、遺構の確認はしえなかったが出土状況にまとまりがみられるため、何らかの遺構に関連したものと考えてよいだろう。ＴＪ－４の弥生時代包含層では２ケの銅鏃が出土した。

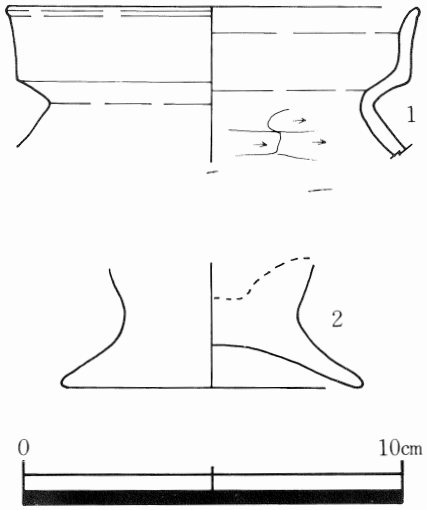
第１項　検出された遺物

天神山遺跡から出土した遺物は、弥生時代、古墳時代、中世遺物がみられる。このうち中世遺物は布勢天神山城関連の遺物であろうと思われる。

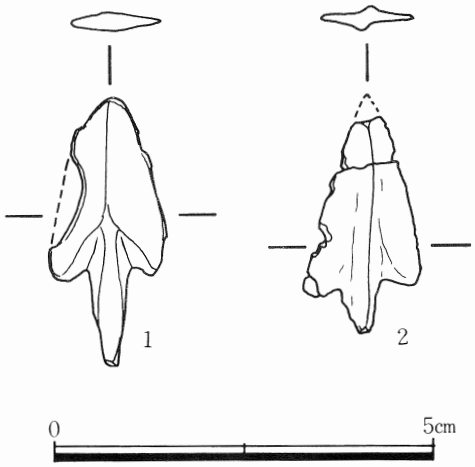
弥生時代　多量の土器片が出土しているが、磨滅したものが多く図化できたものは２点である。ＴＪ－４より銅鏃２点が出土している。

古墳時代　顕著な遺物はなく、須恵器片が少量弥生・古墳時代包含層の上面より出土している。

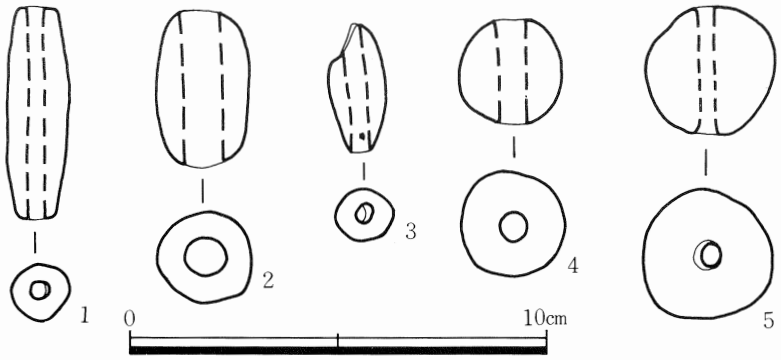
中世　陶磁器類、土師質皿が出土した。土師質皿は包含層の出土であるが、まとまりのある出土状況を呈している。陶磁器類には、青磁・青白磁・白磁などの輸入陶磁器の他、備前焼・須恵器系陶器などの日本産陶器がある。この他、土釜２点を出土している。



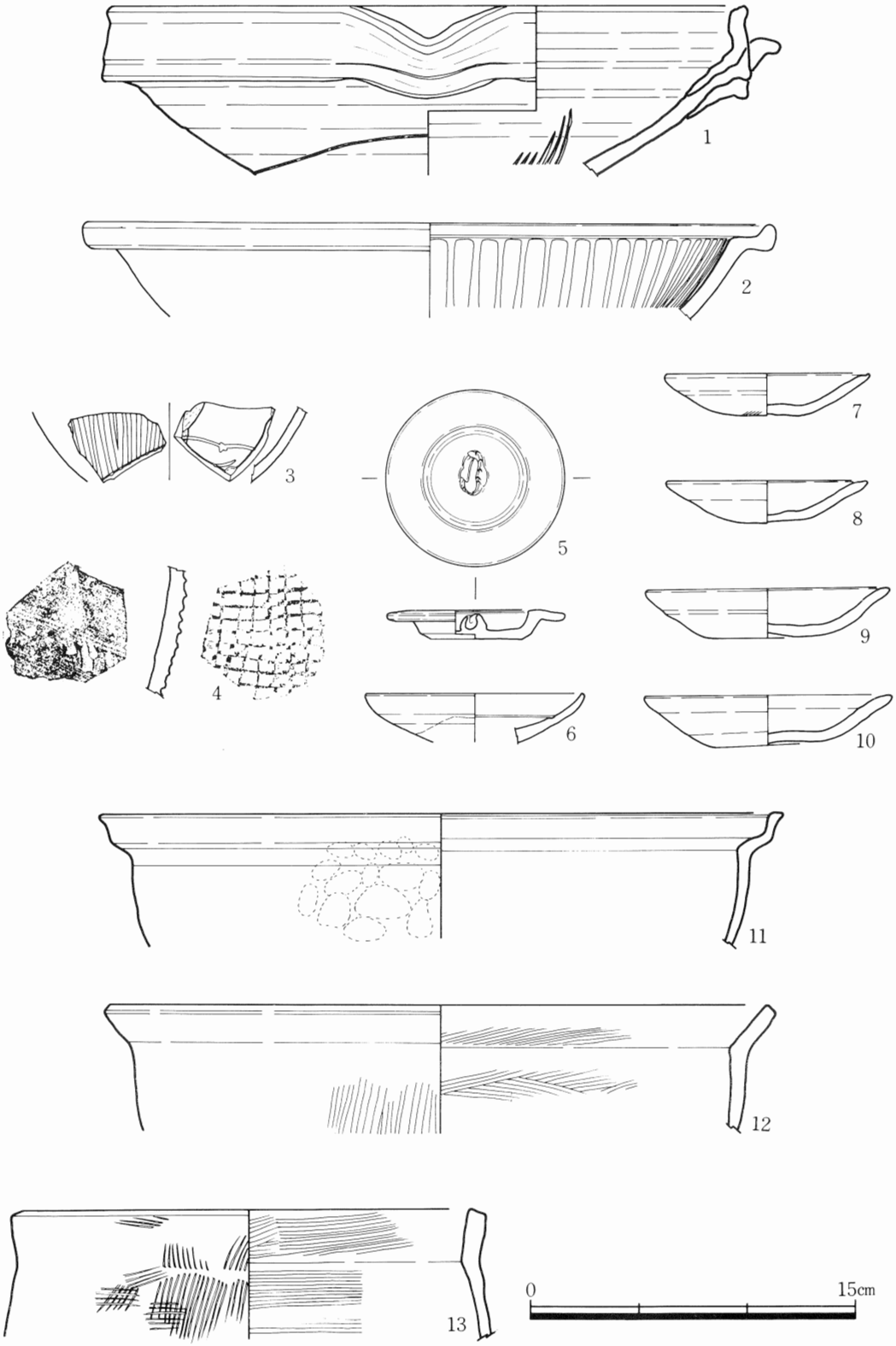
第24図　出土遺物実測図（弥生式土器）



第25図　出土遺物実測図（銅鏃）



第26図　出土遺物実測図（土錘）



第27図　出土遺物実測図（中世陶磁器）

表1　出土遺物観察表

出土地点	土器番号	形　態　の　特　徴	成形・調整手法の特徴	備　　考
SK・3	1	甕。下胴部・底部を欠損する。口縁部は外反し、上端部をややつまみあげる。胴部はほぼ球形。	口縁部は内外ともヨコナデ。胴部外面は横または斜方向のハケのち、ナデを施す。内面へラケズリ、上部に指頭圧痕を残す。	褐色・黒色。砂粒を含む。スス付着。
SI・1 P 9	2	高坏坏部。口縁部はほぼ直立で、端部は外反する。円盤充塡。	口縁部上部外面に２条の浅い凹線を施す。底部外面はタテハケ。口縁部上部内面はヨコナデ、下部及び底部内面はタテハケ。	橙色。口縁端部のみ褐色。大粒の砂粒（３～４㎜）を多く含む。焼成はやや軟質。
SI・1 P10	3	甕。完形。外反する短い口縁で広い口縁端部に２条の平行沈線を施す。最大径は、胴部中央やや上にあり、少し肩が張る。平底。	口縁部内外面ヨコナデ。肩部外面タテハケ、胴部中央外面斜め方向のハケ、下胴部外面タテハケ。胴部内面は底面から口縁に向かって、半周右上がり、半周左上がりのヘラケズリ。底部内面指頭圧痕。	淡褐色。口縁・肩部に赤彩が残る。底部、胴下半は二次焼成のため赤変。スス付着。砂粒を多く含み焼成良好。
A 区	4	甕。短かく外反する口縁部。口縁端部にヘラによる刻み目。口縁部よりやや下方に、突帯を貼付する。	口縁部内外ヨコナデ。胴部上半外面タテナデの後、突帯を貼付。突帯部ヨコナデ。内面は弱いヘラケズリ。	淡褐色。突帯下方、一部黒色。
A 区	5	壺。大きく外反する口縁部。上端及び口縁端部面にヘラ状工具による刻み目。４条の平行沈線。沈線上に２個の円形浮文を貼付。	内外ともヨコナデ。口縁端部はタテ方向のナデ。	淡橙色。砂粒を含む。
A 区	6	壺。大きく外反する口縁部。口縁端部は肥厚し、上端は0.4㎝の巾で上方へ突出する。４～５条の平行沈線。	内外ともヨコナデ。	淡橙色。内面は黒斑で、灰褐色。砂粒を含む。
A 区	7	壺。大きく外反する口縁部。口縁端部は肥厚し、上端は0.4㎝の巾で上方へ突出する。３～４条の平行沈線の上に、ハケ状工具による刺突文を２段に施す。	内外ともヨコナデ。	淡乳褐色。口縁端部淡灰褐色。細砂粒を含む。
A 区	8	壺。大きく外反する口縁部。口縁端部は肥厚、ハケ状工具による刺突文。	口縁部内外ヨコナデ。胴部上部はタテハケ。	淡乳褐色。胎土は緻密。
A 区	9	壺。口縁部は横方向に外反。頸部はほぼ直立し、ゆるやかに外反。頸部下半に２条以上の凹線文を施す。	口縁端部にハケ状工具による連続文。口縁部内外ともヨコナデ。頸部外面はタテ方向のヘラミガキ。内面ヨコナデ。	淡乳褐色。細砂粒を含む緻密な胎土。
A 区	10	壺。外反し、端部が肥厚する口縁部。上端が0.3㎝巾で突出。下端は斜下方に延びる。	口縁端部は、5条の平行沈線上に斜め方向の刺突文。３個の円形浮文を貼付。内外面ともヨコナデ。	赤橙色。大粒（３～４㎜）の砂粒を含む。
A 区	11	壺。口縁部は外反し、端部が下垂する。外面は、ハケ様工具による刺突文でかざる。	外面の連続刺突文は、右上りののち、交差した右下りの刺突を加える。内面ヨコナデ。	淡橙色。胎土は砂粒を含む。
A 区	12	器台？外反する脚台部。口縁端部に１条、筒部に４条の沈線を持つ。複数の円孔。	内外面ともヨコナデと思われる。	灰褐色。細砂粒を含む緻密な胎土。

表2　出土遺物観察表

出土地点	土器番号	形　態　の　特　徴	成形・調整手法の特徴	備　　考
A 区	13	器台？ハの字状に開く脚台部。口縁端部は拡張し、３条の沈線をめぐらす。円孔を持つ。	外面及び端部をヨコナデ、脚内面をヨコハケで調整する。	淡乳褐色。外面赤彩。細砂を含む緻密な胎土。
A 区	14	器台。ハの字状に開く脚台部。外面下部に３条の凹線をめぐらす。複数の円孔。	内面及び端部ヨコナデ。外面にタテハケが残る。	淡褐色、外面を赤彩する。細砂を含む緻密な胎土。
A 区	15	脚。わずかに開く脚と考えられる。６条の凹線。	外面ヨコナデ。内面はナデ。	細砂粒を含む緻密な胎土。橙色を呈す。
A 区	16	器台。ハの字状に開く脚部。外面に10条の凹線。	内面はハケ目調整ののちヨコナデ。外面は、脚下部に10条の凹線を施し、これより上部にはハケ目、他はヨコナデ。	淡黄褐色。全体に風化が激しい。
A 区	17	器台。やや内湾ぎみに開く。口縁端部及び外面に沈線をめぐらす。	外面タテハケ、内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデで調整。	砂粒を多く含む粗い胎土。淡褐色。
A 区	18	器台。ハの字状に開く脚。端部で屈曲し外反する。口縁端部及び外面に平行沈線。	外面タテハケ、内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ。	大粒の砂粒を含む粗い胎土。淡乳褐色。
A 区	19	壺。頸部からゆるく外反する口縁を持ち、端部は拡張し４本の平行沈線をめぐらす。	外面頸部以下をタテハケ、内面頸部を斜位のハケを施す。口縁部はヨコナデ。	暗黄灰褐色。径0.5～２㎜の砂粒を含む。
A 区	20	壺。頸部から外反する口縁。端部は平坦面を作る。	口縁部ヨコナデ。肩胴部外面タテハケ、内面斜位のヘラケズリ。	淡黄褐色。胎土は、１～２㎜の砂粒を含む。
A 区	21	鉢。口縁端部を外反させる。	口縁部ナデ、指頭圧痕が残る。内面下位からの斜め方向のヘラケズリ。外面は剝落不明。	灰褐色。砂粒を含む。胎土。
A 区	22	高坏。大きく外反し、段をもって立ち上る坏部。口縁端部に３本の平行沈線。	口縁部ヨコナデ。外面一部横方向の細いヘラミガキ。他はナデ。	淡褐色。砂粒を多く含む胎土。
A 区	23	壺。くの字状に外反する短い口縁部と、肩部の張る胴部を持つ。口縁端部は、わずかに拡張し、端面に３条、内面に3条の平行沈線をめぐらす。頸部に一対の透孔を持つが、左右対象になると思われる。	口縁部及び肩部外面ヨコナデ。胴部内面に、成形、調整時のヘラ、指頭及び爪の圧痕が残る。	淡茶褐色、胎土・焼成とも良好。
A 区	24	壺。くの字状に外反する口縁部。端部はやや下垂する。	口縁部ヨコナデ。以下外面、ヨコ及びタテのハケ目。内面ヘラケズリ。	赤褐色。外面にスス付着。
A 区	25	壺。頸部が立ち上り外反する口縁部。口縁端部はわずかに拡張し、４条の平行沈線をめぐらす。端面に円形浮文を貼る。	口縁部ヨコナデ。頸部外面、肩部タテハケ目。	淡橙色。砂粒を含む胎土。
A 区	26	壺。くの字状に外面する口縁部。端部上端がやや立ち上がる。	口縁部ヨコナデ。肩胴部外面ていねいなナデ、内面は不定方向のヘラケズリ。	淡橙色。砂粒を含む胎土。
	27	壺。くの字に外反し、口縁端部を拡張する。端面に３条の平行沈線。肩部にヘラ描きの斜格子文を施す。	口縁部ヨコナデ。外面タテハケ。内面頸部ナデ、以下ヨコハケ。	淡乳褐色。砂粒を多く含む。
A 区	28	甕。くの字に外反する口縁。やや上下に拡張し、２条の平行沈線をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色。外面にス付着。細砂粒を含む緻密な胎土。

表3　出土遺物観察表

出土地点	土器番号	形　態　の　特　徴	成形・調整手法の特徴	備　　考
A 区	29	甕。くの字に屈曲する口縁部。	口縁部ヨコナデ。肩部外面タテハケ、内面ナデ。	淡乳褐色。外面スス付着。細砂粒を含む緻密な胎土。
A 区	30	甕。頸部から強く屈曲し外反する口縁部。口縁端部を上下に拡張し、３条の平行沈線をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。肩部外面タテハケ。内面は頸部をヨコハケ、以下をヨコヘラケズリ。	橙色。外面スス付着。砂粒を含む胎土。
A 区	31	甕。くの字に外反する短い口縁部。口縁上端部は上方に突出する。端面に２条の平行沈線。	口縁部ヨコナデ。外面タテハケ。内面頸部ナデ、以下をヨコヘラケズリ。	淡褐色。砂粒を含む胎土。
A 区	32	壺。上方にラッパ状に開く口縁部。口縁端部を上下に拡張する。口縁端面に４条、頸部に６条の平行沈線をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。	橙色。５～７㎜の礫を含む粗い胎土。
A 区	33	壺。上方にゆるく開く口縁部。端部を下垂させ外方に面を作り平行沈線をめぐらす。また、端面に対になった円形浮文を貼付。頸部には、断面台形の凸帯。	全体的に剝落が激しいが口縁部、頸部はヨコナデ。	淡乳褐色。粗い胎土で焼成は軟質。
	34	甕。くの字に外反する口縁部。端部を上下に拡張し、３条の平行沈線をめぐらす。	ヨコナデ。	淡乳褐色。砂粒を含む胎土。
A 区	35	甕。くの字に外反する口縁部。端部をわずかに拡張し、３条の平行沈線をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。外面タテヘラミガキ。内面ハケ目調整ののちナデ。	
A 区	36	甕。くの字に外反する口縁部。端部に２条の平行沈線。	口縁部ヨコナデ。外面タテハケ。頸部内面、ハケ及びナデ、以下をヨコヘラケズリする。	橙色。砂粒を多く含む。
	37	甕。くの字状に外反する口縁部。端部は斜め下方に拡張する。	口縁部ヨコナデ。肩胴部外面タテハケ。内面はヘラケズリののちハケ目調整。	淡乳褐色。胎土は砂粒を多く含む。
A 区	38	甕。くの字に外反し、口縁端部を大きく上下に拡張する。端面に３条の平行沈線をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。頸部内面をナデ、以下をヨコヘラケズリ。	淡橙褐色。砂粒を多く含む。
A 区	39	甕。くの字に外反する口縁部。端部を下垂させ端面に３条の平行沈線をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。外面タテハケ、内面剝落部多く不明だがハケ目痕残る。	淡乳褐色。砂粒を多く含む胎土。
A 区	40	甕。くの字に外反する口縁部。端部を上下に拡張し、２条の平行沈線をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。頸部内面指頭によるナデ。肩部外面タテハケ。内面ヨコヘラケズリ。	淡橙色。砂粒を含む胎土。
A 区	41	甕。口縁端部を拡張し、複合口縁状を呈す。端面に６条の平行沈線	口縁部ヨコナデ。内面頸部以下ヨコヘラケズリ。	淡乳褐色。砂粒を含む胎土。
A 区	42	甕。口縁端部を拡張し、複合口縁状を呈す。端面に３条の平行沈線	口縁部ヨコナデ。肩部外面タテハケ目調整ののちナデ。頸部内面ナデ、以下をヨコヘラケズリ。	淡乳橙色。細砂粒を含む胎土。
A 区	43	甕。口縁端部を拡張し、端面に３条の平行沈線をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。頸部以下ヨコヘラケズリ。	淡黄灰褐色。砂粒を含む胎土。
A 区	44	甕。複合口縁。口縁部外面に５～６条のくし描き沈線。	口縁部ヨコナデ。内面頸部以下ヨコヘラケズリ。	淡褐色。胎土は砂粒を含む。

表4　出土遺物観察表

出土地点	土器番号	形　態　の　特　徴	成形・調整手法の特徴	備　　考
A 区	45	複合口縁状を呈する甕口縁部。口縁部外面４条の平行沈線。	口縁部ヨコナデ。	灰褐色。胎土は粗い砂粒を含む。
A 区	46	壺。外反する複合口縁。口縁外面に11条のくし抽き平行沈線を施したのち三重圏のスタンプ文を下部にめぐらす。また頸部外面に平行沈線をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。頸部外面タテハケののちヨコナデ。頸部内面ナデ、以下をヨコヘラケズリ。	淡褐色。胎土は粗い砂粒を含む。焼成は良好である。
	47	甕。頸部から大きく外反し、上方に立ち上る複合口縁。外面にくし描き平行沈線。５本単位の工具を使用し、下半に施したのち上半に施すが、中央で２条が重なり8条となる。	ヨコナデ調整。	淡橙褐色。細砂粒を含む胎土。
A 区	48	甕。頸部から大きく外反し、上方に立ち上る以較的短い口縁部。外面に３条の平行沈線。	口縁部ヨコナデ。頸部外面ヨコナデ、内面ヨコヘラケズリ。	黄褐色。細砂を含む。
A 区	49	複合口縁を呈する甕。口縁部外面に10条のくし描き平行沈線。口縁端部は丸くおさまる。	内面頸部以下をヨコヘラケズリ。他はヨコナデ。	淡褐色。外面にスス付着。
A 区	50	甕。複合口縁。外面に12～13条のくし描き平行沈線。	口縁部内面ヨコヘラミガキ。頸部以下をヨコヘラケズリ。	淡乳褐色。細砂を含む胎土。
A 区	51	甕。複合口縁。端部は平坦で矩形を呈す。外面に４条の平行沈線を施す。	口縁端部及び外面ヨコナデ、内面ナデ。頸部外面ナデ、内面ヨコヘラケズリ。	淡褐色。砂粒を含む。胎土。
A 区	52	甕。複合口縁。外面に９条のくし描き平行沈線。	内面頸部以下ヨコヘラケズリの他はヨコナデ。	淡褐色。砂粒を含む胎土。
A 区	53	甕。複合口縁。口縁外面に４条の浅い平行沈線。	内面頸部以下ヨコヘラケズリの他はヨコナデ。	淡褐色。砂粒を多く含む。
A 区	54	甕。複合口縁を呈すが、内面の段はゆるやかである。外面に18～19条のくし描き平行沈線。	口縁端部及び外面ヨコナデ。内面ナデ、頸部以下ヨコヘラケズリ。	淡乳褐色。砂粒を含む。
A 区	55	甕。複合口縁を呈する口縁部。外面に12条のくし描き平行沈線。	頸部内面ヨコヘラケズリの他はヨコナデ調整。	褐色。細砂粒を多く含む。
A 区	56	器台受部。大きく開く口縁部、下端は下垂する。外面に７条の平行沈線。	口縁端部ヨコナデ。外面口縁直下ていねいなナデ、以下ヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。	暗黄褐色。外面に赤色顔料を塗付した痕跡。外面にスス付着。
A 区	57	器台受部。内湾ぎみに立ちあがる口縁部。下端は下垂する。外面に８条の平行沈線。	口縁部及び内面ヨコナデ、外面ヘラミガキ。	淡黄茶褐色。砂粒を含む。硬質。
A 区	58	器台受部。外方に大きく開く口縁部。	口縁端部外面ナデ。他はヘラミガキ。	淡橙色。赤彩痕あり。胎土は緻密。
A 区	59	器台脚部。外面に６条の平行沈線。端部はやや内湾ぎみに屈曲する。	外面ヘラミガキ。内面端部ナデ、上部ヨコヘラケズリ。	暗茶灰褐色。
A 区	60	器台脚部。外面に12条の平行沈線。	口縁端部ヨコナデ。外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリとナデ。	淡褐色。砂粒を含む胎土。
A 区	61	底部。	内外面ナデ調整。	淡橙色。砂粒を含む胎土。
	62	底部。やや裾広がりの高台状を呈す。	外面タテハケ、内面、接地部ナデ。	外面淡灰褐色。内面黒灰色。砂粒を含む。

表5　出土遺物観察表

（　）を付したものは現存値

出土地点	土器番号	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
A区	63	底部。	外面ハケ目	内面褐色、外面橙色粗い砂粒を含む。
A区	64	底部。	調整不明	淡褐色。外面スス付着。
A区	65	甕口縁部。複合口縁を呈し、端部は丸くおさまる。	口縁部ヨコナデ。内面頸部以下ヨコヘラケズリ。	淡乳褐色。細砂粒を含む。
A区	66	甕口縁部。複合口縁。	ヨコナデ調整。	淡褐色。赤彩痕。
A区	21図1	大形の甕口縁部。備前焼。	口縁部は折り返し玉縁状を呈す。	内面暗赤褐色、外面褐色。頸部以下ゴマシオ様を呈す。胎土は砂粒を含み焼成は良好。
A区	21図2	すり鉢口縁部。備前焼。口縁部は、ほぼ直立する。	口縁部ナデ。	暗赤褐色。胎土焼成とも良好。
A区	21図3	火舎口縁部。スタンプ文がめぐる。	口縁部ヨコナデ。肩部内面ヨコハケ。	瓦質。黒色。
A区	21図4	青磁酒会壺？	鎬のある蓮弁を有する。	暗灰緑色。胎土は淡灰色。
A区	21図5	青磁碗。		淡緑色の釉で淡灰色の胎土。
A区	21図6	染付碗。口縁端部がやや外反する。	宝相華唐草文。	呉須はくすんだ藍色を呈す。
A区	21図7	染付高台部。		呉須は、淡藍色。
A区	21図8	甕？須恵質。	外面に格子目タタキ、内面ハケ目。	灰色。胎土は緻密で焼成も良好。
A区	21図9	土師質小皿。	内面ヨコナデ、外面ナデ、指頭圧痕残る。	淡乳褐色。緻密な胎土。
A区	21図10	土師質小皿。	ナデ。	淡乳褐色。緻密な胎土。口縁部とスス付着。
A区	21図14	土師質小皿。	ナデ。	淡乳褐色。内面に赤彩痕。外面スス付着。
A区	21図12	土師質小皿。	口縁部及び内面ヨコナデ。外面ナデ。	淡乳褐色。
A区	21図13	土師質小皿。	口縁部及び内面ヨコナデ。外面ナデ。	淡乳褐色。
A区	21図11	土師質皿。	口縁部ヨコナデ、他はナデ。	淡褐色。
A区	21図15	土鈴。釣手と球体上部が残存。	手づくねによる成形。内面に指頭圧痕残る。	黒灰褐色。
天神山地区	27図1	すり鉢。備前焼。内面に6条の刻線すり目を施す。	内外ともナデ仕上げ。	暗赤褐色。焼成は良好。
天神山地区	27図2	青磁盤。内面にヘラケズリによる蓮弁を浮き出させる。		淡緑色。胎土は淡灰色。
天神山地区	27図3	青磁碗。		暗緑色。胎土は淡灰色。

表6　出土遺物観察表

出土地点	土器番号	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
天神山地区	27図4	甕？須恵質。	外面に格子目タタキ、内面ハケ目。	灰色を呈し、胎土は緻密で焼成も良好。
天神山地区	27図5	青白磁蓋。		淡灰白色。胎土焼成良好。
天神山地区	27図6	白磁皿。	内面に貫入がみられる。	淡黄白色。淡灰白色の胎土で焼成良好。
天神山地区	27図7	土師質小皿	ナデ。底部に指頭圧痕。口縁端部内面に沈線。	淡乳褐色。口縁端部の一部にスス付着。
天神山地区	27図8	土師質小皿。	ナデ。底部にヨコハケ痕あり。	淡乳褐色。
天神山地区	27図9	土師質小皿。底部が若干へこむ。	ナデ。	淡乳褐色。
天神山地区	27図10	土師質小皿。	ナデ。	淡乳褐色。
天神山地区	27図11	土師質土鍋。口縁部は段をもって立ちあがる。	内面ナデ。外面指頭圧痕残る。	外面黒褐色。内面淡灰色。外面スス付着。
天神山地区	27図12	土師質土鍋。口縁部浅いくの字に外反する。	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ。内面ヨコナデ。	内面淡黄褐色。外面暗黄褐色、スス付着。
天神山地区	27図13	土師質土鍋。口縁部わずかに外反する。	内面はナデののちヨコハケ。外面、ナデののちタテハケ、一部その上にヨコハケ。	淡茶褐色。

表7　出土遺物観察表（土錘）

（　）を付したものは現存値

挿図番号		出土地区	遺存状態	重量	備考
第11図	1	A区	完存	15g	淡橙色
	2	B区	一部欠	(5g)	淡橙色
	3	A区	完存	35g	淡乳褐色
	4	A区	完存	33g	淡褐色　黒斑あり
第26図	1	天神山地区	完存	11g	淡橙褐色　手づくね整形
	2	天神山地区	一部欠	(17g)	淡橙褐色
	3	天神山地区	一部欠	(3g)	赤色
	4	天神山地区	完存	17g	淡黄褐色　黒斑あり
	5	天神山地区	完存	25g	淡乳褐色　黒斑あり。全面剝落

表8　県内銅鏃出土地一覧表

番号	出土地	所在地	個数	分類	備考	
1	浜坂砂丘	鳥取市浜坂	5	—	表採	弥生
2	湖山砂丘	鳥取市湖山	4	—	中茶屋出土1ヶ，他表採	〃
3	天神山遺跡	鳥取市湖山町字下帆城	2	腸抉状銅鏃	鳥取市教育委員会　昭和56年度調査	〃
4	長江	東伯郡東郷町	1	三翼銅鏃	「羽合町史」・耕作中出土	外国産
5	長瀬高浜遺跡	東伯郡羽合町	12	腸抉状銅鏃他	鳥取県教育文化財団　昭和52～57年度調査	古墳
6	伊勢野	東伯郡東伯町	1	—	直良信夫「近畿古文化論叢」による	
7	米子高専付近	米子市彦名	10以上	三角鏃他	米子高専建設に伴う工事中？	外国産

表9　出土遺物観察表(石器)

（　）を付したものは現存値

挿図番号	出土地区	器種	遺存状態	重量	材質	備考
第15図・1	A区	打製石斧	完存	123g	半花崗岩	
第15図・2	A区	打製石斧	一部欠	(86g)	半花崗岩	
第15図・3	A区	打製石斧	一部欠	(150g)	半花崗岩	
第15図・4	A区	打製石斧	完存	45g	角閃石安山岩	
第15図・5	A区	磨製石斧	一部欠	(176g)	細粒砂岩	
第15図・6	A区	磨製石斧	刃部欠	(150g)	細粒砂岩	
第15図・7	A区	磨製石斧	一部残		輝緑岩	
第15図・8	A区	扁平片刃石斧	刃部1/3残		ホルンフェルス化したシルト岩	
第15図・9	A区	磨製石斧	刃部一部残		細粒砂岩	
第16図・1	天神山地4G	敲石	1/2欠	(375g)	溶結凝灰岩	
第16図・2	A区	敲石	1/3欠	(310g)	角閃石安山岩	
第16図・3	A区	磨石	1/2欠	(191g)	黒色千枚岩	
第16図・4	A区SI・1	敲石	1/3欠	(185g)	安山岩	
第16図・5	A区	敲石	完存	215g	半花崗岩	
第16図・6	A区	敲石	完存	175g	クローム花崗岩	
第16図・7	A区	敲石	一部欠		黒色千枚岩	
第17図・1	A区	砥石	一部欠		半花崗岩	
第17図・2	B区	砥石	一部残		無斑晶質板状安山岩	
第17図・3	A区	砥石	完存	55g	流紋岩	
第17図・4	A区	砥石	一部欠		流紋岩	
第17図・5	A区	砥石	一部欠		ホルンフェルス化したシルト岩	
第17図・6	A区	石包丁	一部欠		緑色片岩	
第17図・7	A区	玉未製品			水晶	
第18図・1	A区	磨石	完存		玄武岩	
第18図・2	A区	石皿	一部残		粗粒玄武岩	
第18図・3	A区	石錘	完存	78g	ハンレイ岩	
第18図・4	A区	石錘	完存	40g	流紋岩	
第18図・5	A区	石錘	完存	128g	安山岩	
第19図・1	A区	石鏃	完存	1.7g	無斑晶質安山岩(サヌカイト)	
第19図・2	A区	石鏃	完存	0.45g	無斑晶質安山岩(サヌカイト)	
第19図・3	A区SI・1	石鏃	完存	1.1g	無斑晶質安山岩(サヌカイト)	
第19図・4	A区	石匙未製品			無斑晶質安山岩(サヌカイト)	
第19図・5	A区	石鏃	完存	2.1g	無斑晶質安山岩(サヌカイト)	
第19図・6	A区	石鏃	完存	1.1g	無斑晶質安山岩(サヌカイト)	
第19図・7	A区	玉未製品			軟玉	擦切り痕あり

第4章　ま　と　め

帆城遺跡は、桂見地内にあって県道鳥取・鹿野・倉吉線北側の水田の後背地で、布勢山王日吉神社がある丘陵の南西裾部の微高地上に立地する。

今回の調査は、上記の丘陵の西麓を北上する道路建設予定地の調査であった。予定地は、遺跡のほぼ中央を南北に伸びており、地形の差異によってA・B地区に区分して調査を行った。A地区は遺跡の南北で、縄文時代～中世以降の遺物や遺構を確認し、B地区では中世あるいは中世以降の少量ではあるが遺物と遺構を確認した。これらの事実は、縄文～中世以降へと連綿として続いた住居域であったことが推察でき、現代においても宅地化が進み住居域として生活が営まれている。

遺跡の始源は縄文時代後期に遡ることもできるが、少量の遺物のみの検出であって遺構は確認し得ていない。その後、中世以降まで遺跡は存続するが、古墳時代・古代（奈良・平安時代）の期間は空白である。

遺跡の中心となった時期は弥生時代と中世期であった。弥生時代では、出土した土器の様相から後期初頭から中頃にかけてが中心であったと思われる。しかし、中期や後期後半の土器もみられ少量ではあるが前期終末の土器の出土から考えると、弥生時代全般にわたり盛衰をみながら継続していたものと思われる。中世期では、時期は確定できないが遺物と検出した遺構からみて、布勢天神山城の存続した期間とほぼ同じ時期と考えている。

A地区では、弥生時代後期中葉の竪穴式住居跡（ＳＩ・１）を検出した。ＳＩ・１は建替えが行われた形跡がみられるが時間的な差はあまりなかったようである。ＳＩ・１に伴う遺物としては、完形甕・高坏・壺・石製品がみられる。ＳＩ・１で特徴的なものとして石製品をあげることができる。特に石鏃・砥石・玉未製品の出土が注目される。石鏃は無斑晶質安山岩（いわゆるサヌカイト）製のもの５点と石匙１点検出されている。砥石は５点（表９参照）出土しており、第17図３は全面に使用痕があり一面には凹部がみられることにより玉砥石の可能性も考えられる。同図７は水晶で、底部と側面の一部に研磨痕があり垂飾あるいは玉未製品と考えることもできる。第19図７は軟玉（ネフライト）の玉未製品で、研磨痕とスリ切リ痕が認められる。この他生活関連の多くの石製品がみられた。ＳＩ・１は、住居跡で確認された玉砥石状石製品や玉未製品が極めて少量だが出土したことで、断定できないがいわゆる玉作工房の性格をもつ住居跡であったとも考えられる。

中世期の遺構としては、A地区で溝状遺構と石組を伴う土坑・井戸を検出し、B地区ではA地区と同時期のものと思われる石組遺構を確認した。

A・B両地区の中世期遺構の性格や時期は、それを判定する遺物が少ないので断定はできない。しかし、現存する古絵図類などによって当時の状況を推察することは可能である。すなわち、寛文10年（1670）製といわれる鳥取県立博物館蔵の「御留場図」、貞享５年（1688）ころに完成した小泉友賢の「因幡民談記」、「因幡民談記」の転写本で「因幡軍談記」他などの絵図類がある。これ

らの写本が、どの程度当時の状況を表わしているかは不明だが、ここでは「御留場図」と「因幡軍談記」をもとに考えてみたい。

両図とも、布勢山王日吉神社が所在する丘陵の囲りに廣徳院跡（因幡軍談記では香徳院、以下同じ）、清浄院跡（正勝寺）、古学院跡（興覚院）などの名がみられる。廣徳院跡と清浄院跡は、両図とも同位置に描かれているが、古学院跡は「御留場図」では丘陵の西側あるいは北西裾に描かれており、「因幡軍談記」との違いが指摘できる。しかし、「因幡軍談記」が「因幡民談記」の転写本であることを考えると、「御留場図」にしたがった方が妥当であろう。この場合、帆城遺跡のA地区で検出した溝状遺構は、廣徳院に関連した堀割の性格を持つ遺構であると考えられる。この溝状遺構は、A－1調査区の東北隅で止っているが、この部分を門跡と考えられなくもないが、背後地が非常に狭いため現在のところ性格は不明である。また、B地区のB－5にみられた石組遺構は、位置的に考えても古学院跡に関連した遺構であると考えられる。これらの遺構は、「山王社縁起」に「九院ノ佛閣モ有。」とあって、上記の「廣徳院跡」・「清浄院跡」・「古学院跡」などは、この「九院の佛閣」のなかにふくまれるものであろう。帆城遺跡で検出された遺構も、「廣徳院跡」・「古学院跡」と推定したが、あるいは「御留場図」などに描かれなかった「九院の佛閣」の痕跡であった可能性も考えねばならない。

天神山遺跡は、湖山町内にあって天神山を中心として周囲に所在する。今回調査した地点は、天神山の西側を北上する道路建設予定地内で、県立鳥取農業高等学校の農場の西隣りであった。

調査の結果、本遺跡での表採遺物は、鳥取農高建設時に排土を当該地に埋めた土中よりの出土であった。この埋土の下には砂層の堆積がみられた。上から中世遺物包含層、古墳時代遺物包含層、弥生時代遺物包含層、無遺物層が観察された。弥生時代遺物包含層は5㎝前後の厚さで小片ばかり出土し、磨滅したものが多かった。しかし、TJ－4グリッドでは銅鏃2ケが出土しており、当該地の周辺に生活圏の存在が充分に考えられる。古墳時代の遺物は少量で須恵器片・土師器片がみられたにすぎない。（表8参照）

中世期の遺物は、中世遺物包含層より出土した多量の土師質皿と盛土中にみられた輸入・国産の陶磁器類などである。包含層中の土師質皿は、出土状況にまとまりがあり廃棄されたものではなく遺構は検出しえなかったが何らかの遺構に関連したものと考えられる。また埋土中にみられた輸入・国産の陶磁器類は、中世陶磁器の研究ひいては天神山城の研究に貴重な資料を提供したといえよう。また、天神山城の中心部は鳥取農高建設に際し、充分な調査も行われないまま葬りさられている現状にあるが、今回調査したTJ－3グリッドは昭和48年県教委調査で確認した堀の西方にあたり、天神山城の堀跡あるいは堀と湖山池の接点にあたるのではないだろうか。鳥取農高建設前の地形には、周囲より一段低い水田が堀状に天神山を巡っており、TJ－3もこの低地に該当する。「因幡軍談記」では天神山を巡る堀が描かれているが、「御留場図」では湖山池から旧湖山川にかけてL字状の堀が描かれており、今回のTJ－3と県教委確認の堀あるいは土塁の位置と一致する。

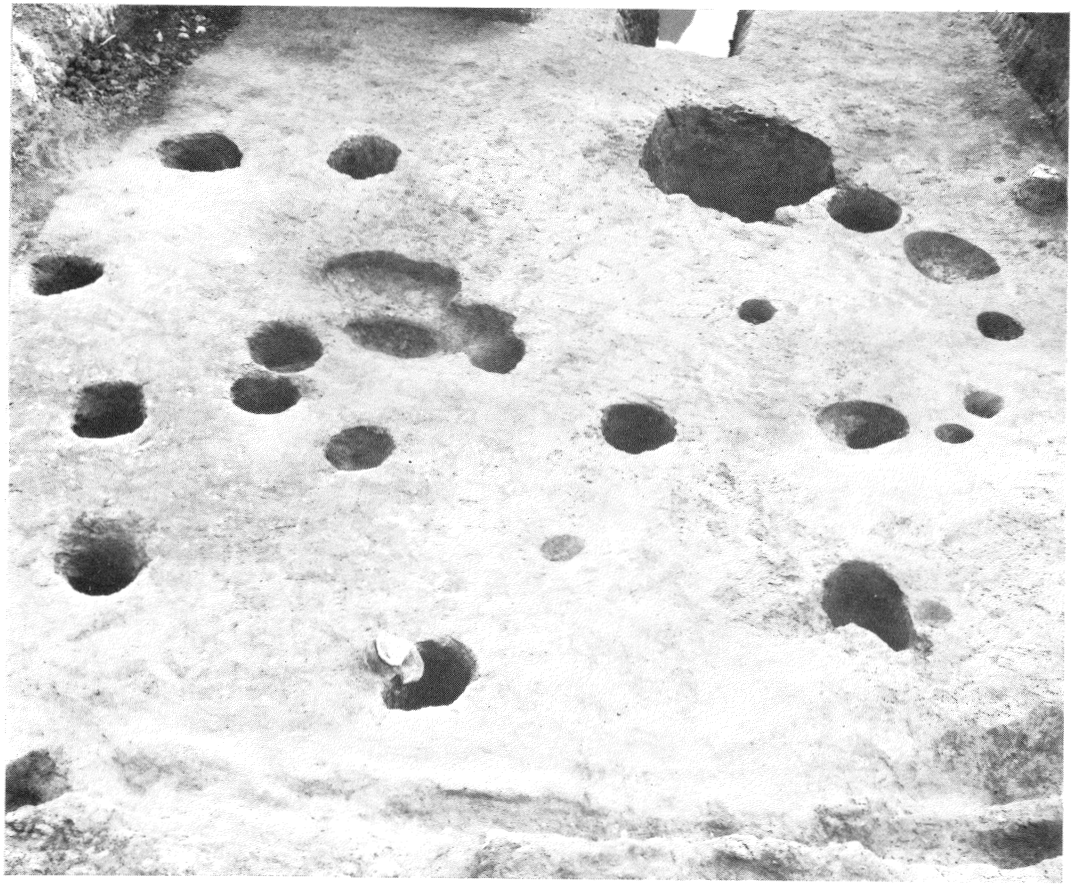
帆城遺跡遠景（南から）

帆城遺跡Ｂ地遠景（北から）

帆城遺跡Ａ地区近景（北から）

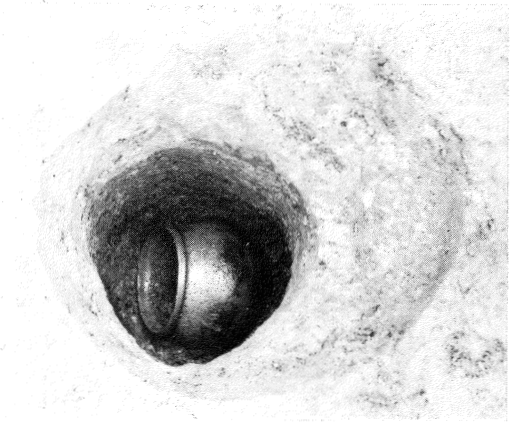
帆城遺跡Ｂ地区グリッド設定風景

図版 1



A地区住居跡近景

A地区住居跡全景



完形甕出土状況

A地区井戸検出状況

B地区5グリッド石列検出状況

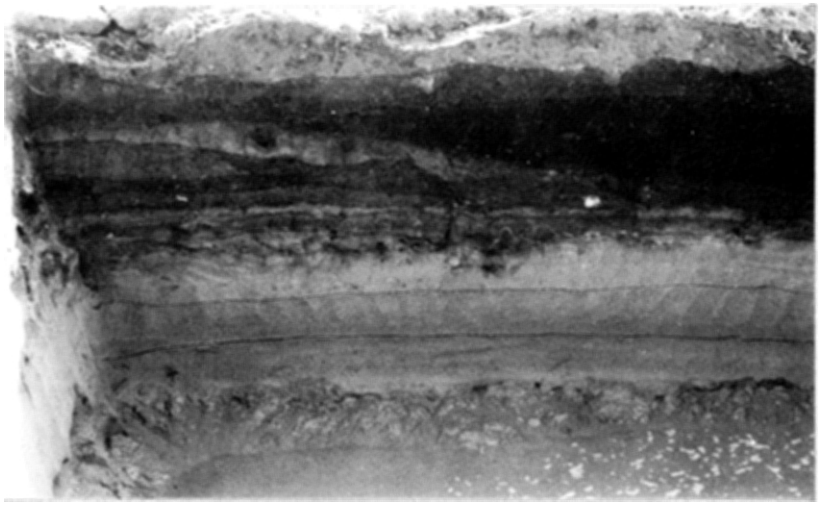
A地区溝状遺構・石列掘方検出状況

A地区貯蔵穴状遺構検出状況

A地区溝状遺構検出状況

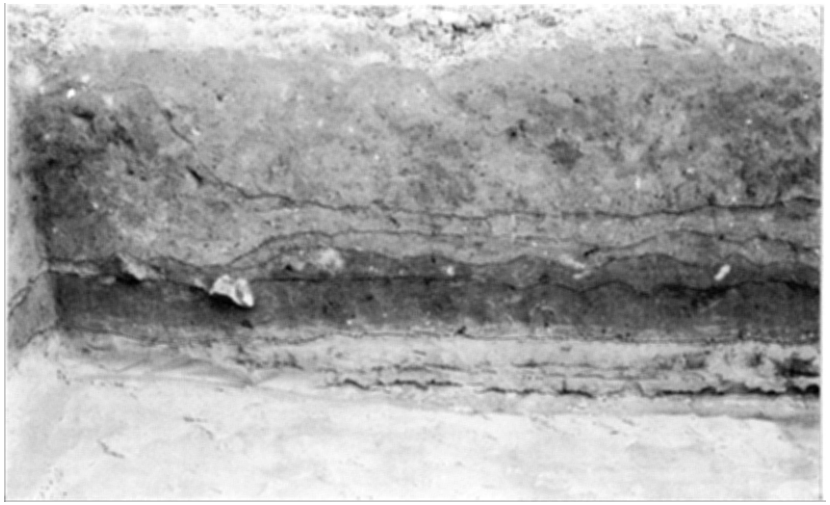
図版 4

天神山遺跡近景（東から）

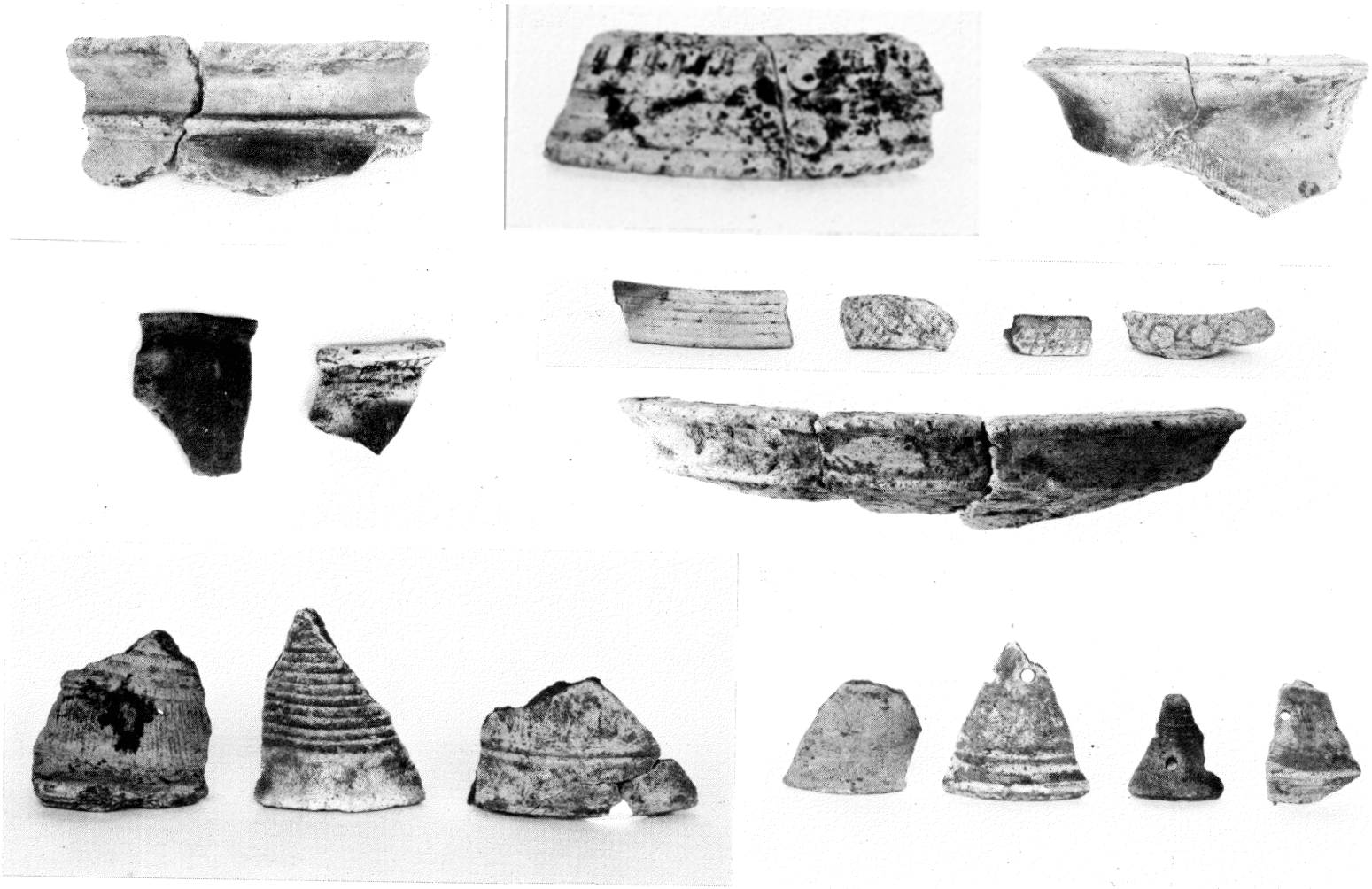


ＴＪ１Ｇ南壁断面

天神山遺跡遠景（北西から）

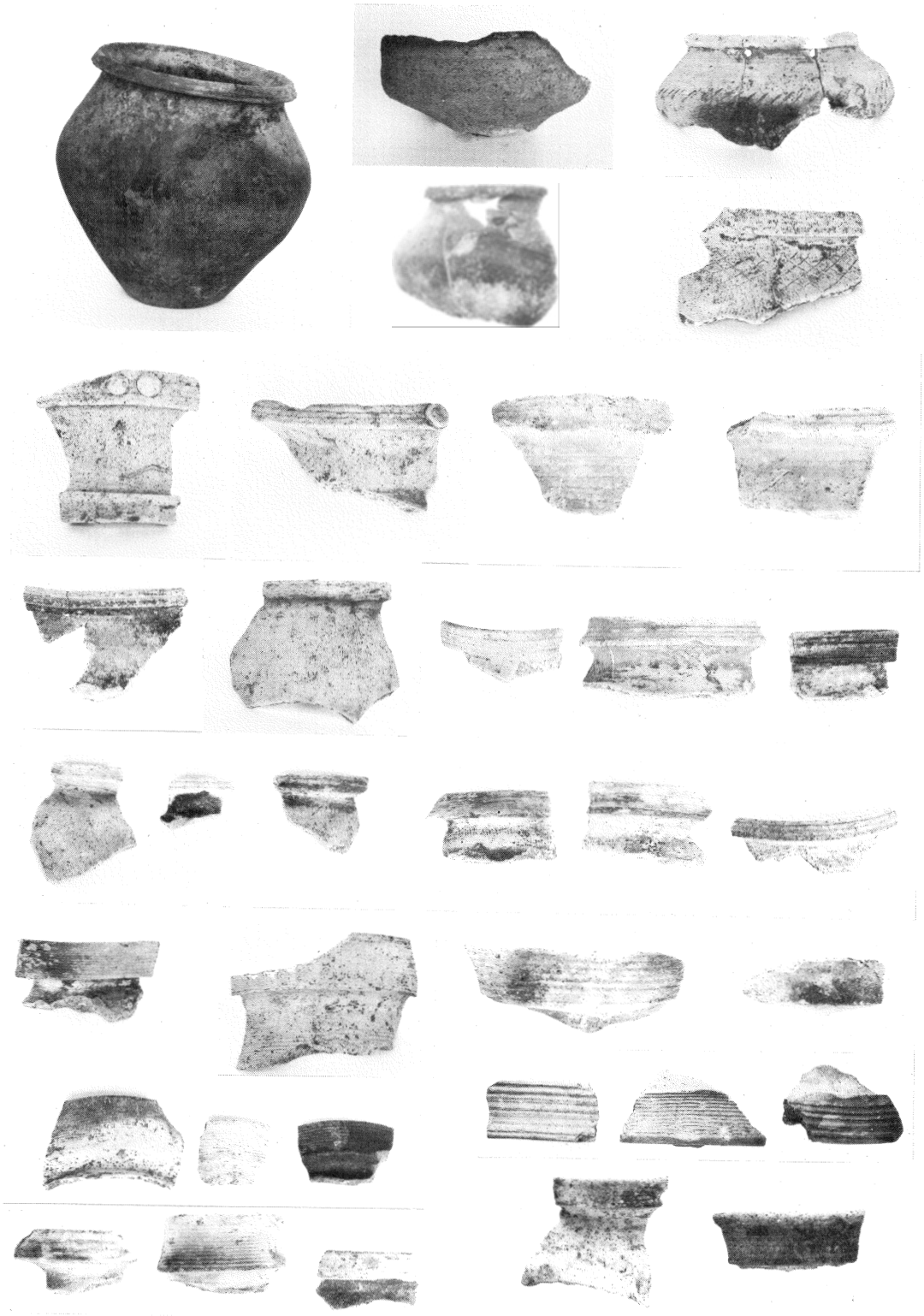


ＴＪ３Ｇ南壁断面

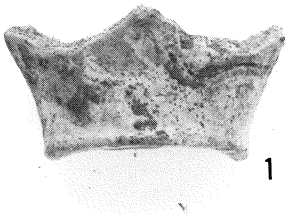


帆城遺跡出土遺物(弥生式土器)

図版　6



帆城遺跡出土遺物（弥生式土器）　（右最下段２点は天神山地区出土）


1

2

14

15

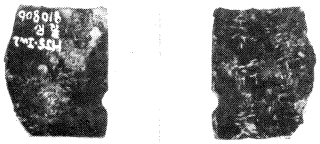
3

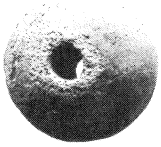
4

5

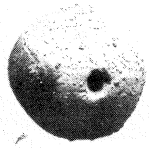
6

7

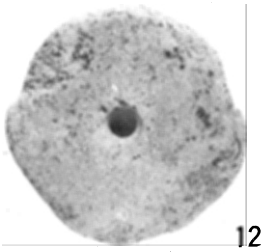

16

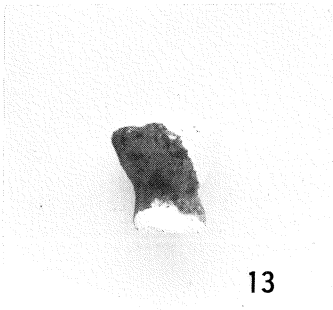

8

9


10

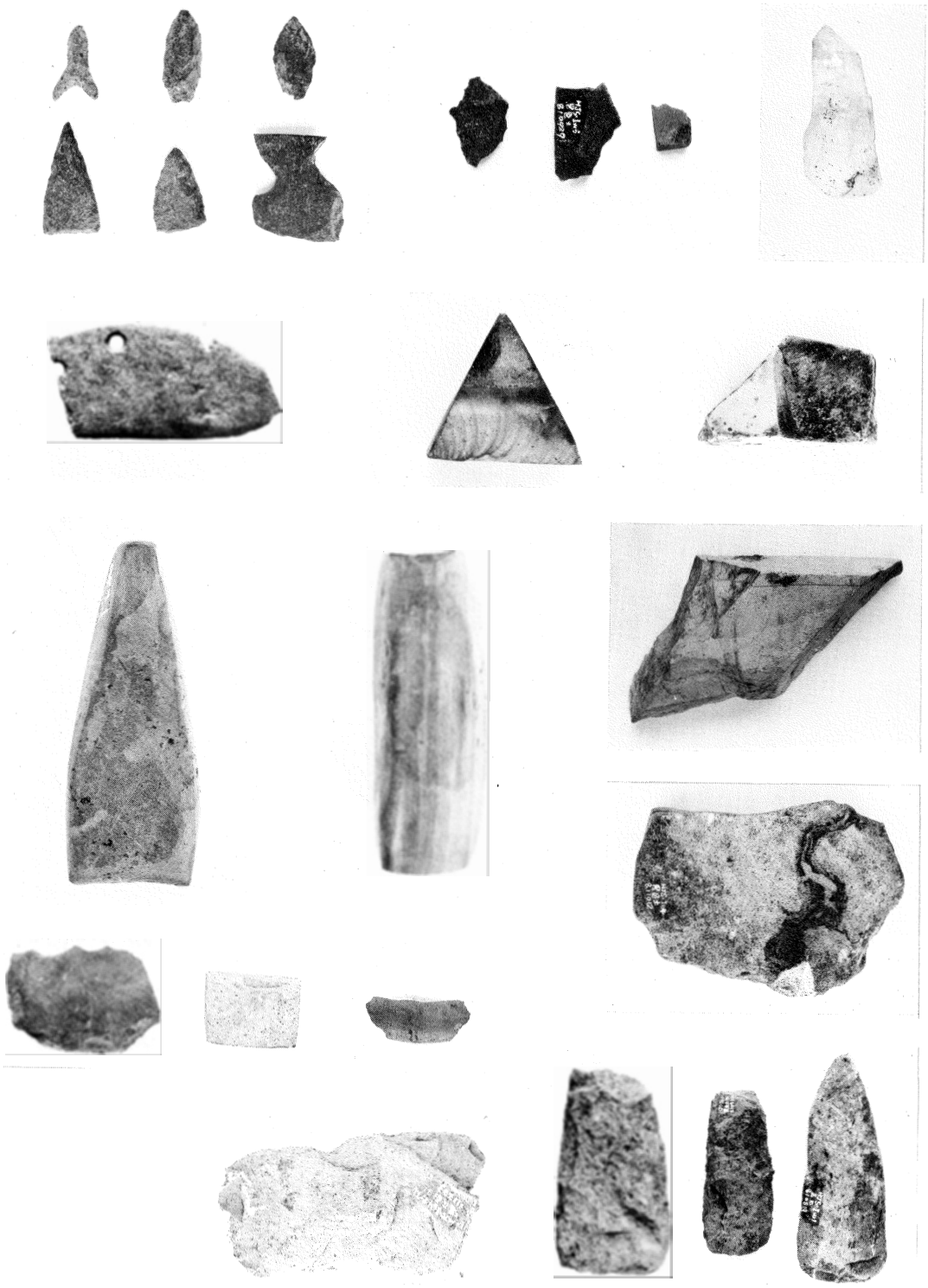
11


12

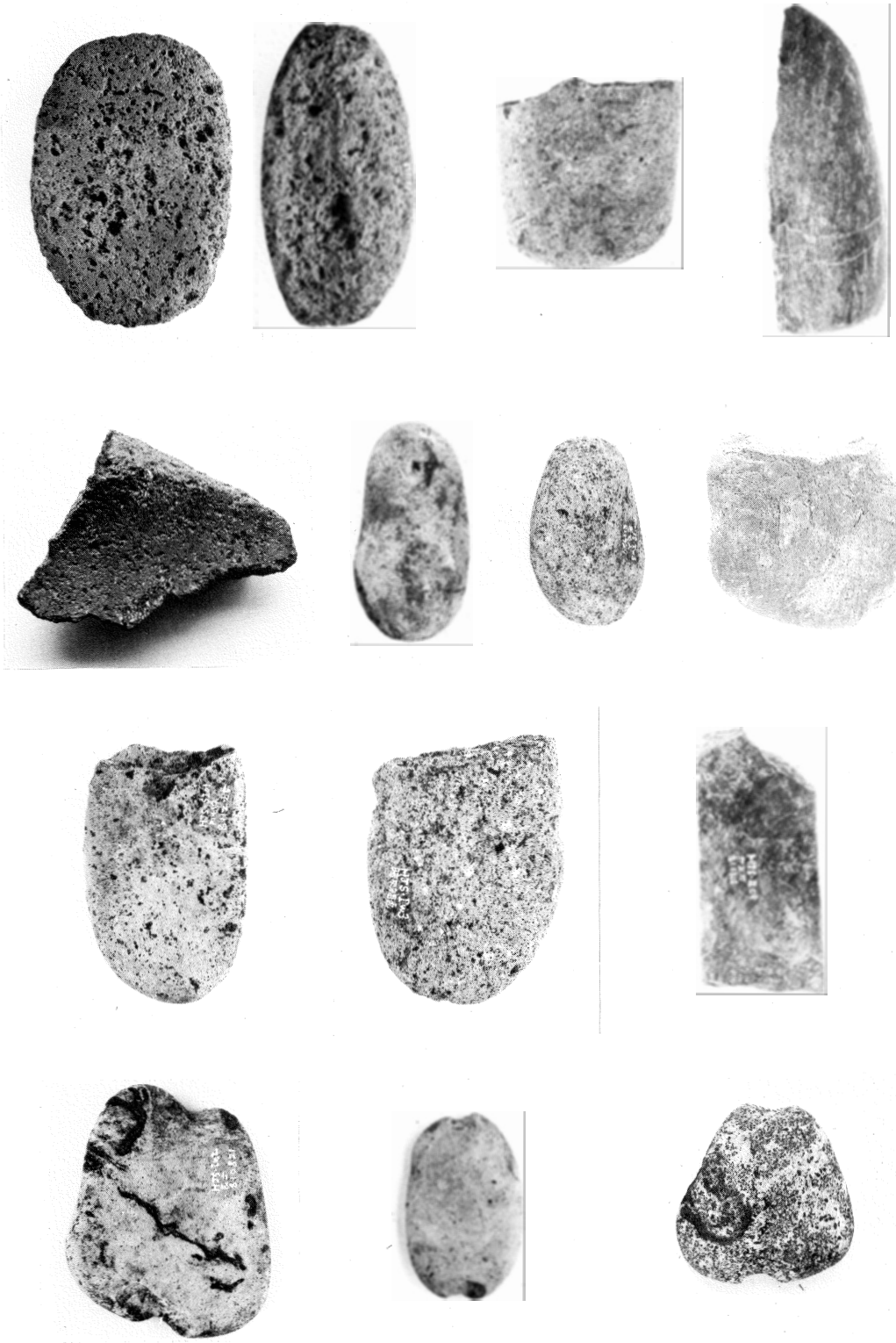

13

1 ～4　帆城遺跡出土遺物
5 ～7　天神山遺跡出土遺物
8 ～9　帆城遺跡出土遺物
10～11　天神山遺跡出土遺物
12～13　帆城遺跡出土遺物
14～15　天神山遺跡出土遺物
16　帆城遺跡出土遺物

図版 8

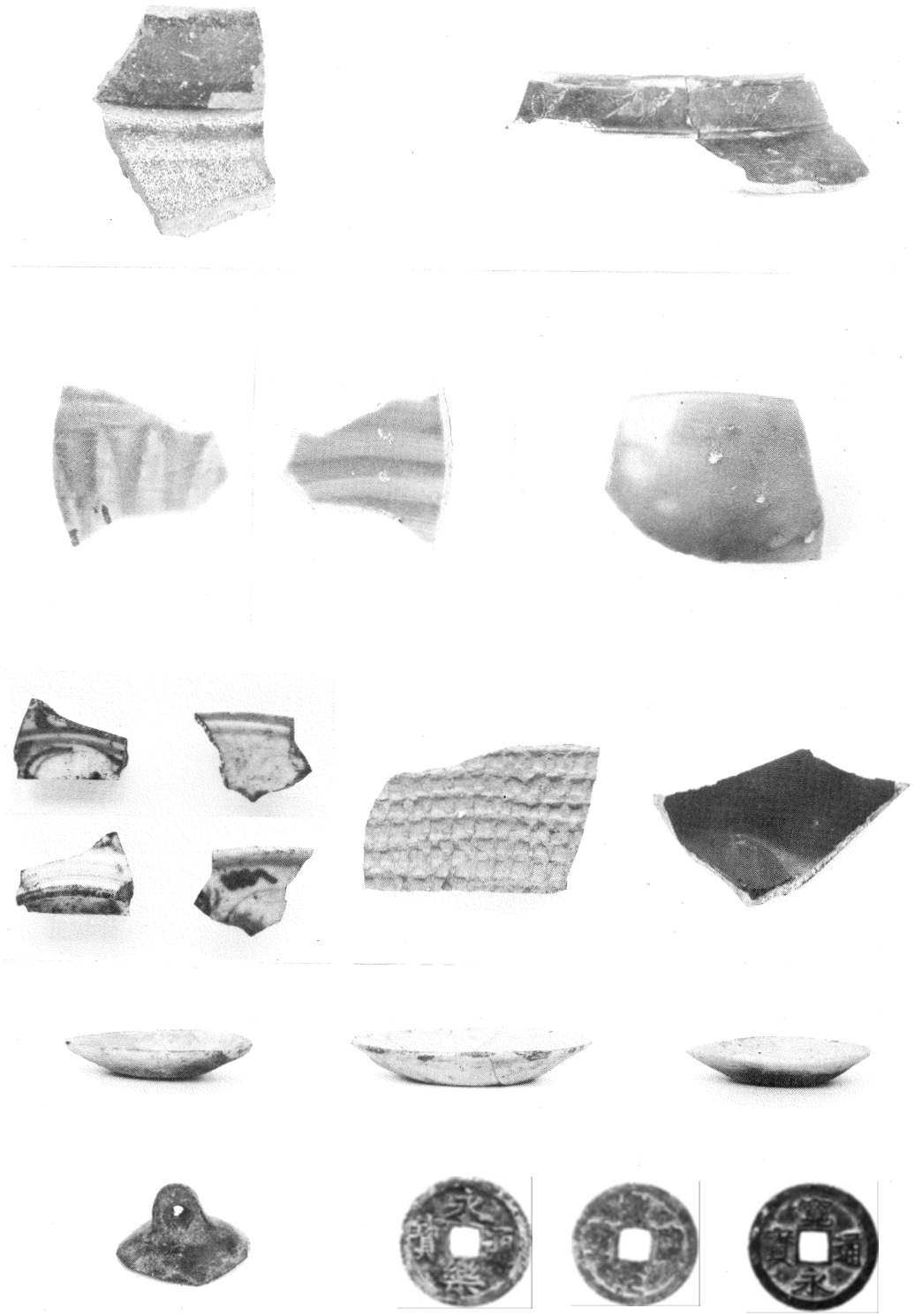


帆城遺跡出土石製品

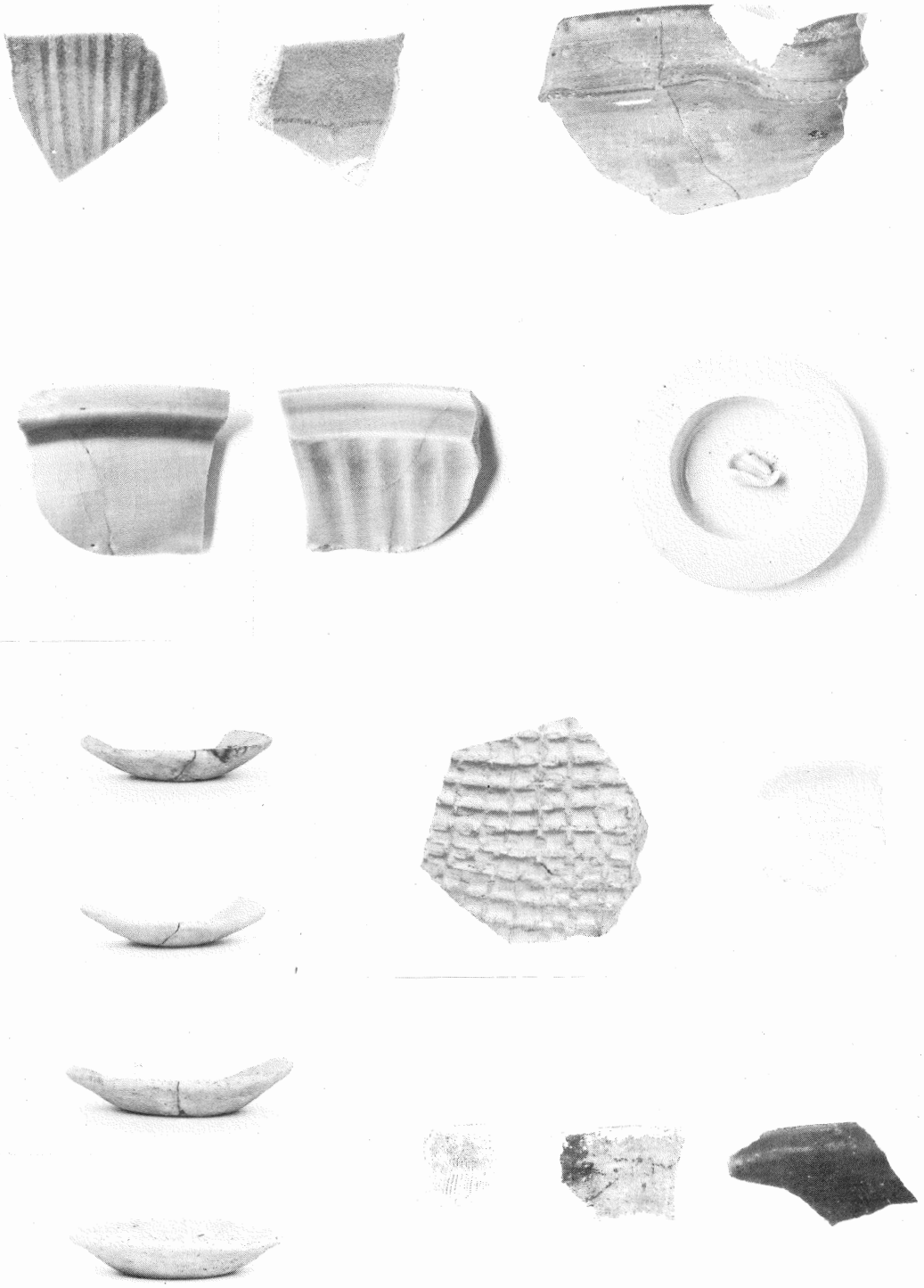


帆城遺跡出土石製品

図版 10



帆城遺跡出土中世関係遺物



天神山遺跡出土中世関係遺物

参　考　文　献

小谷仲男　「鳥取市山王社宝篋印塔とそれを載せる絵図について」『鳥取大学教育学部研究報告』
鳥取大学教育学部　1979

加藤隆昭他　『天神山遺跡発掘調査概報』　鳥取県教育委員会　1973

青木遺跡発掘調査団　『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅲ　1976～1978

鳥取県教育文化財団　「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書」Ⅰ～Ⅳ『鳥取県教育文化財団報告書』3・
5・8・11　1980～1982

鳥取県教育文化財団　「布勢遺跡発掘調査報告書」『鳥取県教育文化財団報告書』7　1981

岩吉遺跡調査団　『岩吉遺跡』　鳥取大学教育学部　1976

鳥取市教育委員会　「桂見遺跡発掘調査報告書」『鳥取市文化財報告書』Ⅴ　1978

〃　〃　「大桷遺跡・Ⅰ」『鳥取市文化財報告書』Ⅵ　1978

〃　〃　「西桂見遺跡」『鳥取市文化財報告書』Ⅹ　1981

米子市教育委員会　『尾高城址発掘調査報告書』　1978

〃　〃　『尾高城址発掘調査報告書Ⅱ』　1979

阿部恭庵　『因幡誌』　1795撰

調査関係者

鳥取市教育委員会事務局　田村一三（教育長）　横尾倫夫（次長）　田村章三（社会教育課長）　谷本勝実（社会教育課長補佐）　大石清人（文化係長）　楮原伸一、片岡由美子　**調査員**　小杉宗雄、平川誠、今田裕嗣、前田均、中野知照　**整理作業**　杉谷美恵子　**作業協力者**　有田浩子、川戸義弘、栗岡美智恵、田中一幸、田中美智枝、坪倉顕示、徳田恵美子、西浦日出夫、西川嘉則、橋本重喜、長谷川千明、福田菊枝、福田静枝、福田末子、福田利美枝、牧野泰浩、宮本真澄、宮脇君枝、山根範久、山枡雅美、山本修一、山本武志、山脇義宣、吉田豊彦、渡辺朱美　**調査指導・協力**　赤木三郎、岡田昭明、鳥取県都市計画課、鳥取土木出張所、鳥取県教育委員会、中野知行、鳥取県立博物館、亀井熙人、野田久男、清水真一、久保穣二郎、三谷巍、若林久雄、行田裕美、中山俊紀、安川豊史、加藤謙、木村有作、藤田三郎

鳥取市文化財報告書 12
帆城遺跡・天神山遺跡調査報告

昭和57年3月20日　印刷
昭和57年3月25日　発行

発行　鳥取市教育委員会
鳥取市尚徳町116番地
電話22－8111番

印刷所　株式会社 矢谷印刷所
鳥取市幸町96番地
電話23－7551番